



くろ だ だい みょう じん ばら い せき  
**黒田大明神原遺跡**

1997年3月

長野県飯田市教育委員会

## 序

飯田市は、自然環境に恵まれ、また古来交通の要衝に位置しており、埋蔵文化財をはじめ多くの文化財を残しています。市北部の上郷地区の場合も、縄文時代以来各所に先人達の足跡が刻まれており、古墳・城跡などたくさんの文化財が残されております。また今回調査された黒田大明神原遺跡の西南には重要有形民俗資料に指定されている「下黒田の舞台」があり、黒田人形芝居が保存・伝承されています。こうした文化財は、私たちの地域社会や文化を形作ってきた様々な証しであり、できる限り現状の姿のままで後世に残し、伝えることが私たちの責務であります。けれども、同時に、私たちはより良い社会や生活を求めていく権利を有しています。ですから日常生活の様々な場面で、文化財の保護と開発という相容れぬ事態に直面することが多くなっています。こうした場合、発掘調査をして記録としてとどめることもやむを得ないことでしょう。

上郷黒田地区は、リンゴなどの果樹栽培を主体とする農村地帯がありますが、同時に近年住宅地としてめざましい変化の見られるところであります。このため朝夕の県道飯島飯田線の混雑ぶりは激しく、幹線道路の整備が強く求められています。殊にこの県道飯島飯田線のバイパス工事は、地区内の主要幹線として懸案の事項がありました。そうした高い公共性を有する点で、今回の調査はやむを得ないものと考えられます。けれども、事業予定地は埋蔵文化財包蔵地黒田大明神原遺跡として周知されており、道路建設により一部が壊されてしまうことになりました。そこで次善の策ではありますが、事業実施に先立って緊急発掘調査を実施して、記録保存を図ることとなりました。

調査結果は本書のとおり、道路建設部分に限定されて十分に遺跡の実態を把握することができなかつたわけでしたが、縄文時代草創期から中世に至までの長い期間、人類の生活の痕跡が認められることがわかりました。このため、文化と伝統が根付くこの黒田地区に、地域の歴史解明の新たな手掛かりが得られたものと確信致します。

最期になりましたが、文化財保護の本旨に厚い御理解を賜った地元の皆様、現地作業・整理作業に従事された作業員の方々に深甚なる謝意を申し述べる次第であります。

平成9年3月

飯田市教育委員会

教育長 小林 恭之助

## 例　　言

- 1 本書は、平成7年度緊急地方道路整備B工事に先立つ『黒田大明神原遺跡』発掘調査報告書である。
- 2 本発掘調査は、飯田建設事務所の委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
- 3 本調査は、平成7年3月に試掘調査を、平成7年7月に本発掘調査を実施し、本報告書完工のための諸整理作業は、平成8年度に実施した。
- 4 本遺跡の発掘調査にあたり、遺跡名は「D I M」の略号を用い、整理図面類および遺物等すべてに使用した。
- 5 本遺跡の発掘調査にあたり遺構名を以下の略号を用い、整理図面類および遺物等すべてに使用した。

・竪穴住居址………S B	・掘立柱建物址・大型建物址………S T	・集石……………S I
・土坑……………S K	・溝……………S D	
- 6 遺物図断面のスクリーントーンは黒鉛・繊維の混入を示す。また、遺構図中のスクリーントーンは焼土の分布を示す。
- 7 本書は調査担当者で検討の上、I・II章を吉川 豊が、IV章の縄文早期前半の土器については馬場保之が、その他については下平博行が執筆した。
- 8 本書の編集は、調査担当者の協議の上、下平が行い、小林正春が総括した。
- 9 本書に掲載した図面類の整理・実測は、吉川・下平が行った。なお整理作業実施にあたり、調査員及び整理作業員が補佐した。
- 10 本書に掲載した遺構図中の数字は、標高を単位mであらわしている。
- 11 本書に掲載した写真は、遺構については吉川・下平が、遺物については㈱ジャステックに委託した。
- 12 本書に関連する出土品および諸記録は、飯田市教育委員会が管理し、飯田市上川路「飯田市考古資料館」に保管している。

# 目 次

## 本文目次

序 例 言	(4) S I 05 .....	35
目 次	(5) S I 06 .....	35
I 経 過	(6) S I 07 .....	36
1. 調査に至るまでの経過 .....	(7) S I 08 .....	36
2. 調査位置・調査区の設定 .....	(8) S I 09 .....	36
3. 調査の経過 .....	(9) S I 10 .....	36
4. 調査組織 .....	(10) S I 11 .....	37
II 遺跡の環境	(11) S I 12 .....	37
1. 自然環境 .....	(12) S I 13 .....	37
2. 歴史環境 .....	(13) S I 14 .....	37
3. 基本層序 .....	(14) S I 15 .....	37
III 調査結果	(15) S I 16 .....	38
1. 縄文時代の竪穴住居址 .....	(16) S I 17 .....	38
(1) S B 01 .....	(17) S I 18 .....	38
(2) S B 02 .....	(18) S I 19 .....	38
(3) S B 06 .....	(19) S I 20 .....	38
(4) S B 07 .....	(20) S I 21 .....	39
(5) S B 10 .....	(21) S I 22 .....	39
(6) S B 13 .....	(22) S I 24 .....	39
(7) S B 14 .....	(23) S I 25 .....	39
(8) S B 15 .....	(24) S I 26 .....	40
(9) S B 16 .....	(25) S I 27 .....	40
(10) S B 17 .....	(26) S I 28 .....	40
(11) S B 18 .....	(27) S I 29 .....	40
2. 縄文時代の大型建物址 .....	(28) S I 30 .....	40
(1) S T 02 .....	5. 中世の掘立柱建物址 .....	51
3. 縄文時代の土坑 .....	(1) S T 01 .....	51
4. 縄文時代の集石 .....	6. 時期不明の溝 .....	51
(1) S I 01 .....	(1) S D 01 .....	51
(2) S I 02 .....	IV 総括 .....	62
(3) S I 03 .....	引用参考文献 .....	68
	報告書抄録 .....	107

## 図版目次

第1図 調査遺跡位置図	4	第35図 S K15~22出土遺物	48
第2図 調査遺跡及び周辺遺跡地図	5	第36図 S K18・24、S I 01・05・09・S I 16出土遺物	49
第3図 基準メッシュ図区画調査位置図	6	第37図 S I 11~29出土遺物	50
第4図 遺構全体図	7・8	第38図 S T01	52
第5図 基本層序	9	第39図 S D01	53
第6図 S B01	11	第40図 遺構外出土遺物（1）	54
第7図 S B02	12	第41図 遺構外出土遺物（2）	55
第8図 S B06	13	第42図 遺構外出土遺物（3）	56
第9図 S B07	14	第43図 遺構外出土遺物（4）	57
第10図 S B01~S B07出土遺物	15	第44図 遺構外出土遺物（5）	58
第11図 S B10	16	第45図 遺構外出土遺物（6）	59
第12図 S B10出土遺物（1）	18	第46図 遺構外出土遺物（7）	60
第13図 S B10出土遺物（2）	19	第47図 遺構外出土遺物（8）	61
第14図 S B10出土遺物（3）	20		
第15図 S B10出土遺物（4）	21		
第16図 S B13	22		
第17図 S B14	23		
第18図 S B15	24		
第19図 S B16	25		
第20図 S B17	26		
第21図 S B18	27		
第22図 S B13~S B18出土遺物	28		
第23図 S T02	29		
第24図 S T02出土遺物（1）	30		
第25図 S K01~08	32		
第26図 S K09~20	33		
第27図 S K21~26	34		
第28図 S I 01~06	41		
第29図 S I 07~14	42		
第30図 S I 11~16	43		
第31図 S I 17~21	44		
第32図 S I 22~24	45		
第33図 S I 26~30	46		
第34図 S K01~14出土遺物	47		

## 写 真 図 版 目 次

図版1	調査区全景	71	図版32	S I 01・05・09・11・16・18・19・ 21・25・29出土遺物	102
図版2	調査区遠景	72	図版33	グリット出土遺物(1)	103
図版3	S B01	73	図版34	グリット出土遺物(2)	104
図版4	S B02・06	74	図版35	グリット出土遺物(3)	105
図版5	S B07・10	75	図版36	グリット出土遺物(4)	106
図版6	S B13・14	76			
図版7	S B15・17	77			
図版8	S B18・S T01・02	78			
図版9	S K01・14	79			
図版10	S K21・22・26	80			
図版11	S I 01・02・03	81			
図版12	S I 05・06・09	82			
図版13	S I 10・11・12	83			
図版14	S I 14・15・16	84			
図版15	S I 17・19・22	85			
図版16	S I 24・25・26	86			
図版17	S I 28・29・S D01	87			
図版18	調査風景・重機作業風景・委託測量 風景	88			
図版19	S B01・02出土遺物	89			
図版20	S B06・07出土遺物	90			
図版21	S B10出土遺物	91			
図版22	S B10出土遺物	92			
図版23	S B10出土遺物	93			
図版24	S B10出土遺物	94			
図版25	S B10出土遺物	95			
図版26	S B10・13出土遺物	96			
図版27	S B17・18・S T02出土遺物	97			
図版28	S T02・S K02・03・07・08・09・ 10・11・13・15・16・17・19出土遺 物	98			
図版29	S K01・18出土遺物	99			
図版30	S K14出土遺物	100			
図版31	S K17・21・24出土遺物	101			

# I 経過

## 1. 調査に至るまでの経過

飯田市北部に位置する上郷黒田地区は、果樹園が主体の農業地区である。しかし近年、周辺の住宅開発が進み、県道飯島飯田線の交通量の増加が著しく、道路整備が懸案となっていた。

平成6年度において、飯田建設事務所長中島利行より県道飯島飯田バイパス座光寺・上郷間の計画が提示され、平成6年度事業として座光寺と上郷を結ぶ橋の橋脚工事を予定しており、埋蔵文化財包蔵地黒田大明神原遺跡に影響が及ぶことが考えられた。このため、平成6年9月30日に、長野県教育委員会文化課・飯田建設事務所・飯田市教育委員会の三者による保護協議を実施した。その結果、事前に試掘調査を実施し、遺構・遺物が確認された部分については、飯田市教育委員会において発掘調査を委託実施し、記録保存を図ることとなった。その後、平成7年3月に本体工事箇所および工事用道路部分の試掘調査を実施した結果、縄文時代の竪穴住居址・集石・土坑・ピットなどの遺構・遺物が確認されたため、飯田建設事務所と再度協議を行い、工事用道路部分を含め本調査を実施することとなった。

その後、平成7年6月28日、飯田建設事務所との間に、委受託契約を締結し、平成7年7月3日より発掘調査を実施する運びとなった。

## 2. 調査位置・調査区の設定

調査区の設定は、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づいて、株式会社ジャステックに委託実施した。(基準メッシュ図の区画方法については、飯田市教育委員会 1996『三尋石遺跡(II)』参照)

調査地点は、LC75 6-31内に位置する。(第3図)

## 3. 発掘調査の経過

諸協議に基づいて、平成7年7月3日、本発掘調査に着手した。7月3日から7日にかけて重機による調査範囲内の表土剥ぎを行い、10日から作業員を入れて発掘調査を開始した。

まず、重機の荒れ土・カラマツの抜痕等の搅乱部分を除去し、竪穴住居址・土坑・集石・掘立柱建物址その他遺構を検出し、順次掘り下げる精査した。そして、遺構・出土遺物についての全体および個別の写真撮影等を行い、航空写真撮影・航空測量調査を株式会社ジャステックに委託実施し、集石・住居址の炉址等の断ち割調査や補充の測量調査をして、7年8月25日、現地での調査を終了した。

引き続き、平成8年度にかけて、飯田市考古資料館において現地で記録された図面・写真類の整理作業、出土遺物の水洗い・接合・復元・実測・トレース等の整理作業を行い、報告書作成作業を行った。なお遺物の写真撮影については、株式会社ジャステックに委託した。

#### 4. 調査組織

##### (1) 調査団

総括 小林正春  
調査担当者 吉川 豊 下平博行  
調査員 山下誠一 馬場保之 吉川金利 福沢好晃 伊藤尚志 佐々木嘉和  
作業員 新井幸子（さちこ）・新井幸子（ゆきこ）・新井ゆり子・池田幸子・伊坪 節・伊藤安正  
伊東裕子・今村春一・今村治子・太田沢男・岡田直人・岡田紀子・奥村栄子・金井照子  
川上一子・北原久美子・北原 裕・木下玲子・櫛原勝子・桐生八千代・久保田定男  
熊谷義章・小池金太郎・小池千津子・小池寛希・小島孝修・小島妙子・小林定雄  
斎藤 薫・坂井勇雄・佐々木真奈美・佐々木美千枝・佐藤知代子・下田英美子  
鈴木尊子・関島真由美・瀬古郁保・高橋セキ子・竹本常子・田中 薫・塚原次郎  
西山あい子・林 員子・原田四郎八・久田 誠・橋本宣子・平栗陽子・福沢育子  
福沢五男・古林登志子・古根素子・星本初子・牧内八代・正木実重子・松沢美和子  
松沢 豊・松下節子・松下友彦・松下寛美・松島 保・松島直美・松島なみ・松本恭子  
三浦厚子・南井規子・宮内真理子・森藤美知子・森本かおり・柳沢謙二・吉川悦子  
吉川小夜子・吉川正実・吉沢佐紀子

##### (2) 事務局

飯田市教育委員会社会教育課（～平成8年6月30日）	博物館課（平成8年7月1日～）
横田 穂（社会教育課長 “ ”）	矢沢与平（博物館課長 “ ”）
小林正春（ “ 文化係長 ”）	小林正春（ “ 埋蔵文化財係長 ”）
吉川 豊（ “ 文化係 ”）	吉川 豊（ “ 埋蔵文化財係 ”）
山下誠一（ “ ” ” ）	山下誠一（ “ ” ” ）
馬場保之（ “ ” ” ）	馬場保之（ “ ” ” ）
吉川金利（ “ ” ” ）	吉川金利（ “ ” ” ）
福沢好晃（ “ ” ” ）	福沢好晃（ “ ” ” ）
伊藤尚志（ “ ” ” ）	伊藤尚志（ “ ” ” ）
下平博行（ “ ” ” ）	下平博行（ “ ” ” ）
岡田茂子（ “ 社会教育係 ”）	牧内 功（ “ 庶務係 ”）

## II 遺跡の環境

### 1. 自然環境（第1・2図）

黒田大明神原遺跡の所在する飯田市上郷地区は、長野県の南端を南北に並走する赤石山脈・木曽山脈の間に広がる飯田盆地のほぼ中央に位置する。北西に野底山・鷹巣山があり、そこを源とする野底川・土曾川が南流し、天竜川と飯田松川に注いでいる。この両河川に挟まれた面積約26km<sup>2</sup>で、東西に細長く緩やかに傾斜した地域である。一帯は天竜川とその支流によって形成された河岸段丘や扇状地上に、往古から現在に至るまで人々の生活舞台が展開している。

『下伊那の地質解説』によれば、伊那谷の段丘は火山灰土の堆積を基準として高位面・高位段丘・中位段丘・低位段丘Ⅰ・Ⅱに大きく編年されている。上郷地区の地形の特徴として、中央部を南北に横断する大段丘があり、これを境として俗に上段（うわだん）と呼称される洪積土壌地帯の中位段丘及び低位段丘Ⅰと、下段（しただん）と呼ばれる沖積土壌面の低位段丘Ⅱが見られ、その段丘崖の高さは約50mを測る。中位段丘・低位段丘Ⅰ地帯は天竜川の現河床面海拔398mとの比高差200~80mを測り、野底山山麓から南東方向に緩やかに傾斜する広大な地域を占めており、野底川による新規扇状地が発達し、総体とすれば乾燥した台地をなしている。中位段丘・低位段丘Ⅰ地帯は三大別でき、南東側に本遺跡のある中位段丘下殿岡面、北東側に黒田大明神原遺跡の立地する中位段丘八幡原面があり、いずれも細長く小高い丘陵地形を呈している。この間の地域が低位段丘Ⅰ伊久間面で2×1kmの広い範囲である。

本遺跡は中位段丘八幡原面の海拔530~550mにあり、全体には南東へ緩い傾斜を持つものの、ほぼ平坦な大地である。北側は座光寺地区との境となる土曾川の浸食谷が口を開けている。南側は湿地を挟んで原の城遺跡のある台地が存在する。

今次調査地点南西側には湿地が見られ、比高差10mほどで、平成8年度調査地点へと続いている。こうした点から段丘面上に幾条もの畝状の微地形が形成されていたと考えられる。今次調査地点もこうした微地形を利用して集落が営まれていたと推測される。

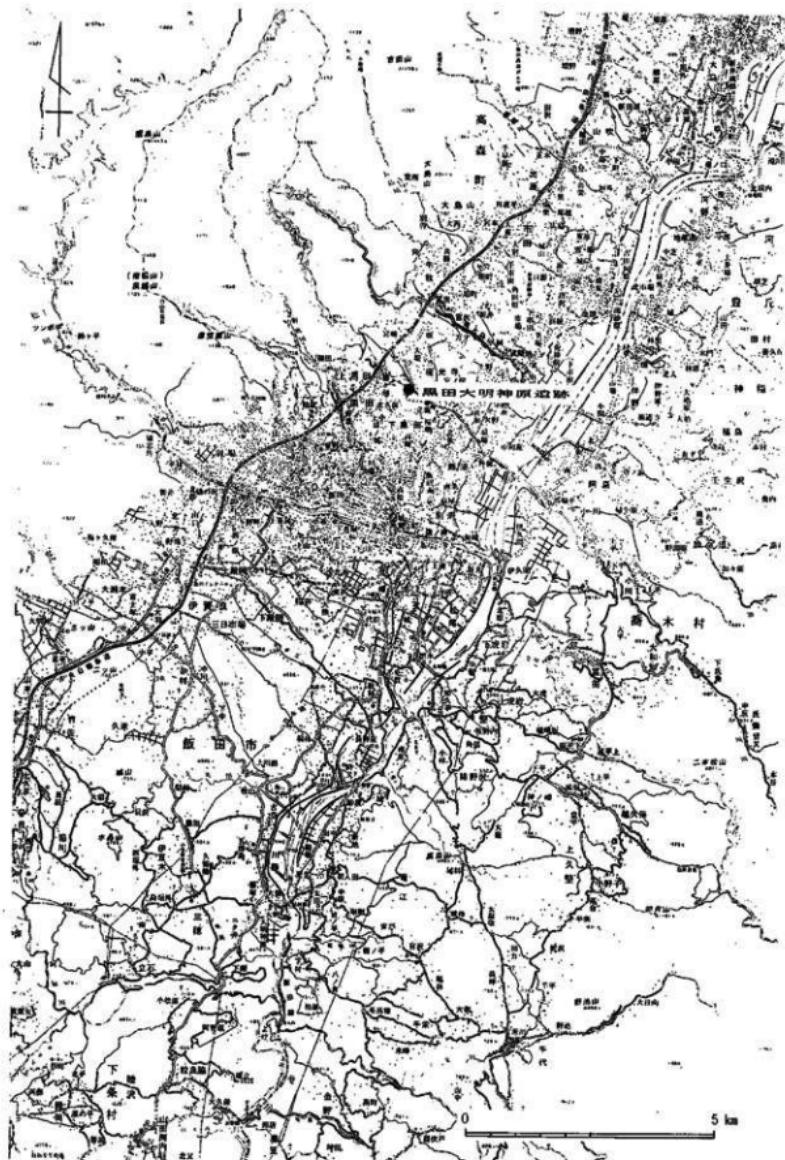
### 2. 歴史環境

上郷地区で今までに確認されている最古の遺跡は、姫宮遺跡と柏原遺跡で、縄文時代草創期の遺物が確認されている。

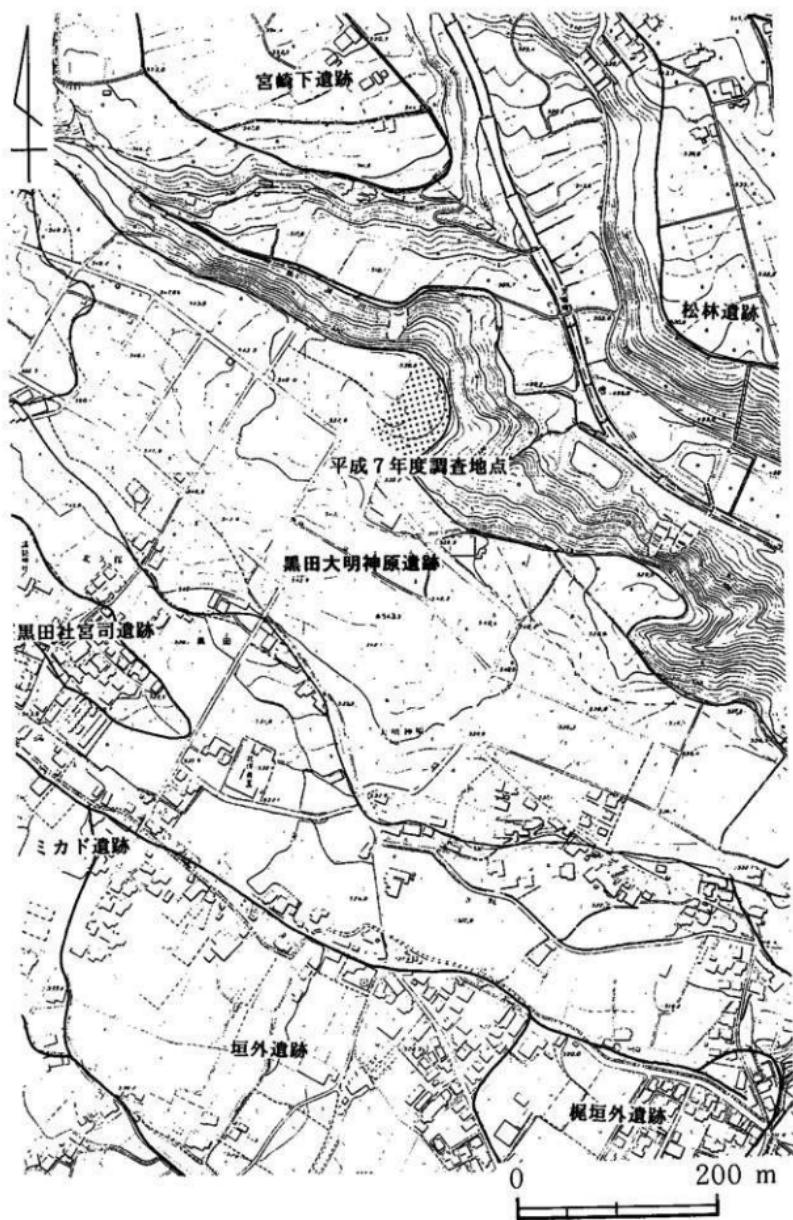
縄文早期を代表する押型文土器・条痕文土器は山よりの八王子遺跡などで確認されているが、住居址などの遺構が検出されたのは西浦遺跡のみであった。

縄文前期は上段の中位段丘を中心に確認されていたが、下段の矢崎遺跡において、前期後半の集落が確認されており、この時期には天竜川の氾濫源を見下ろす段丘までその居住域を広げていたことが推定される。

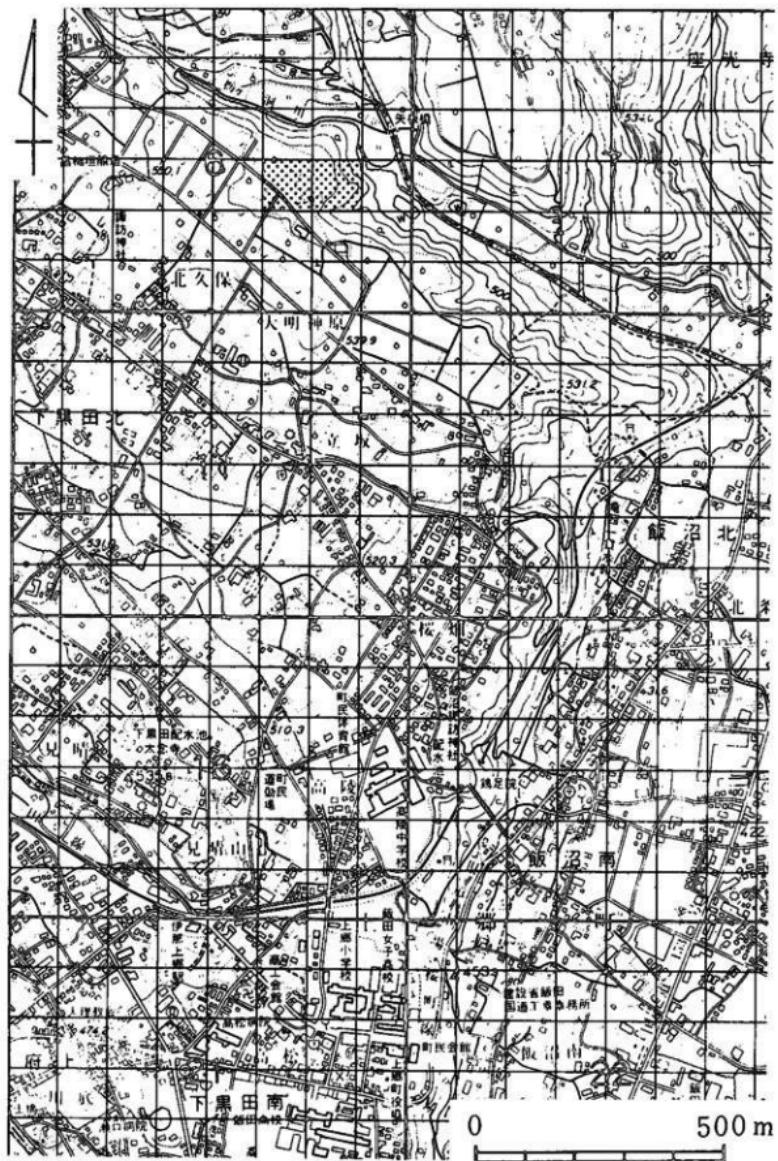
縄文時代中期になると黒田大明神原遺跡に代表される拠点的集落が見られ、地区全域で遺物が確認されているものの調査事例が少なく詳細は不明である。



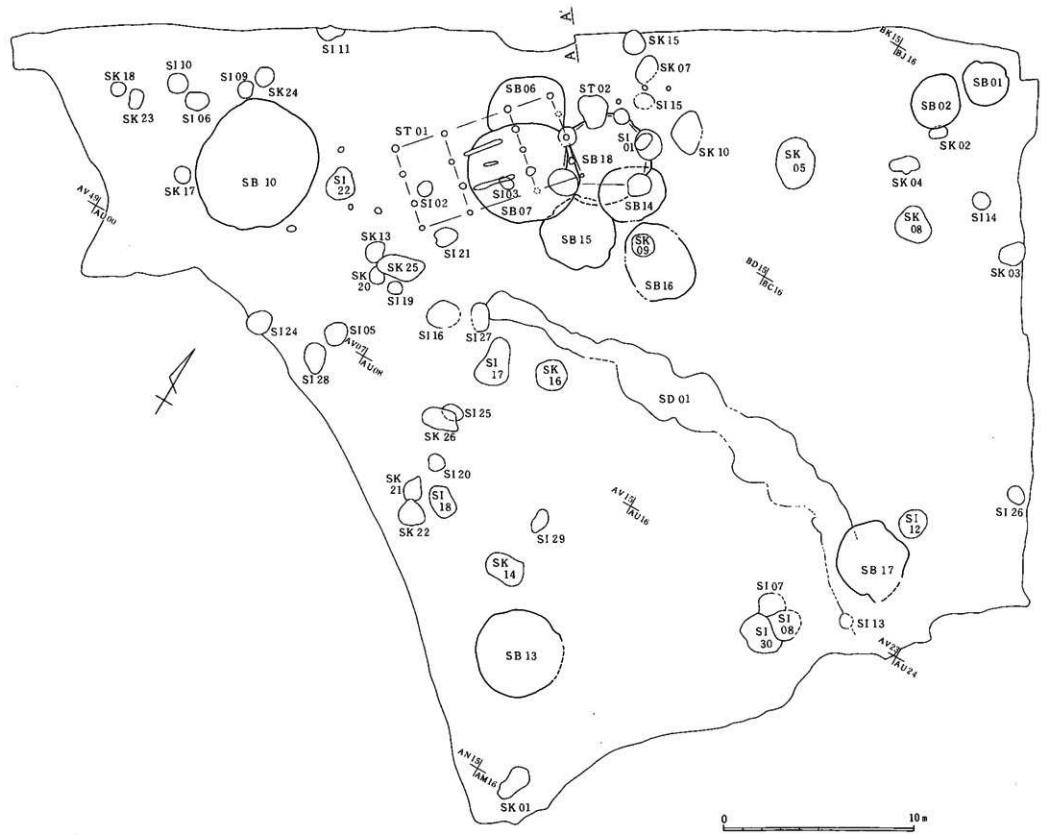
第1図 調査遺跡位置図



第2図 調査位置及び周辺遺跡図



第3図 基準メッシュ区画調査位置図



第4図 遺構全体図

縄文時代後期・晩期は遺跡数が少ないものの、矢崎遺跡において東海系の条痕文土器及び在地の水式が確認されており、弥生時代への移行期の遺跡として注目される。

弥生時代に入ると水稻栽培を経済の基盤とする新しい文化が展開され、下段では丹保遺跡・上段では垣外・高松原遺跡など各地で大規模な集落が確認されるようになり、稻作による生産力の増加とともに爆発的な人口増加がもたらされたと考えられる。

上郷には36基の古墳があったことになっており、そのほとんどが別府の段丘縁部に集中している。前方後円墳3基を除けばすべて円墳であり、時期的には古墳時代後期と考えられている。これらの古墳を作った人々の居住域は、現国道153号線が通過している箇所に形成されている天竜川に平行する段丘面上にあったものと考えられる。

奈良・平安時代の遺跡は、堂垣外遺跡に代表され、古代伊那郡衙とされる座光寺の恒川遺跡とは川を挟んだ対岸の同一段丘面に位置しており、遺構・遺物からみると郡衙と何らかの関係があった遺跡と考えられる。

中世においては4箇所の城跡の存在が知られている。いずれも段丘の突端に位置するものであるが、現在宅地開発が進む中、土塁・堀などの施設が破壊されつつある。

下黒田には江戸時代にはじまって現代まで引き継がれている人形芝居がある。下黒田諏訪神社にはその人形芝居専用の舞台がある。これは、住民の精神活動の拠り所となる建物であり、国の重要民俗有形文化財に指定されており、いまでも伝承されている。また上黒田には一里塚があったとされており、飯島駅前線が旧道筋春日街道にあたるとみられる。

このように太古から人類の生活した痕跡が認められる地区である。

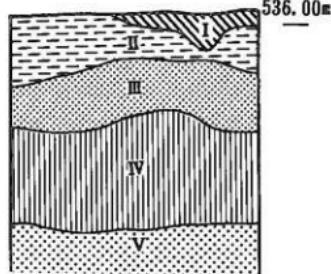
黒田大明神原遺跡については、合併前の町道改良時に3度の発掘調査が実施され、現在までに縄文時代の堅穴住居址23軒・弥生時代の堅穴住居址2軒・平安時代の堅穴住居址1軒・方形周溝墓4基など多くの遺構・遺物が確認されている。

こうした歴史的背景のある上郷地区は文化・文化財が比較的よく伝承された地域の一つと言えよう。

### 3. 基本層序（第5図）

今次調査区北西に位置するBG8・BF8区で基本層序確認の為の調査区を設けた。以下にその基本層序を説明する。

- I層 耕作土層。層厚10cm前後
- II層 黒褐色土。炭化物少量含む。  
粘性弱く、しまり無し。層厚約30cm。
- III層 黄褐色土（漸移層）。炭化物・小礫含む。  
粘性・しまりあり。層厚約30cm。
- IV層 ローム層。明黄褐色を呈する。層厚約40cm  
径1mm程度のスコリヤ粒を含む。粘性あり。
- V層 ローム層。黄橙色を呈する。  
IV層に比べ硬く、しまりがある。



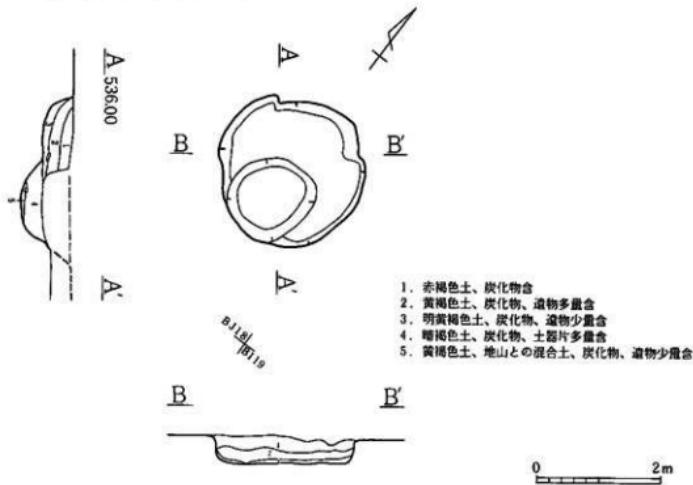
第5図 基本層序



### III 調査結果

#### 1. 縄文時代の堅穴住居址

(1) SB01 (第6図・第1表・第10図)

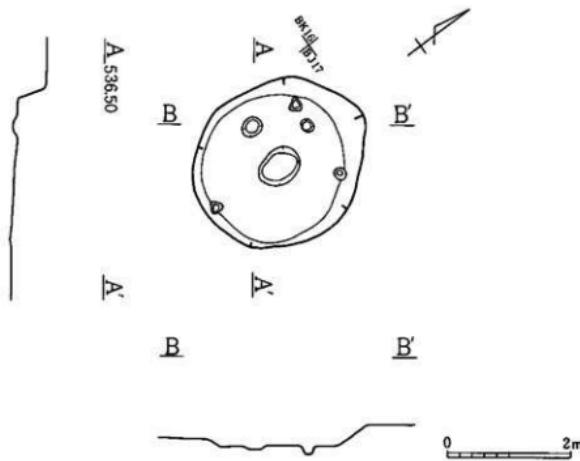


第6図 SB01

検出位置		BK18	覆土		5層に分層		
切合	れる	なし	床	面	堅固		
規模	プラン	円形	住居内施設	主柱穴	確認できず		
規模m	2.4m × 2.35m		土	坑	1.3m × 1.2m × 0.3m		
主軸	不明		入	口	不明		
壁高cm	30~40cm		炉	形狀			
状態	ややなだらか			・規模			
出土遺物			竈	特記事項			
覆土2層を主体に、住居址全面から出土。							
黒鉛を僅かに混入し、山形文が施文される押型文土器							
縄文が帶状施文される土器片・黒曜石フレイク、チップ少量							
特記事項							
黒鉛を僅かに混入する押型文が主体となる住居址。							
時期	縄文時代早期	根拠	出土遺物より				

第1表 SB01

(2) SB02 (第7図・第2表・第10図)

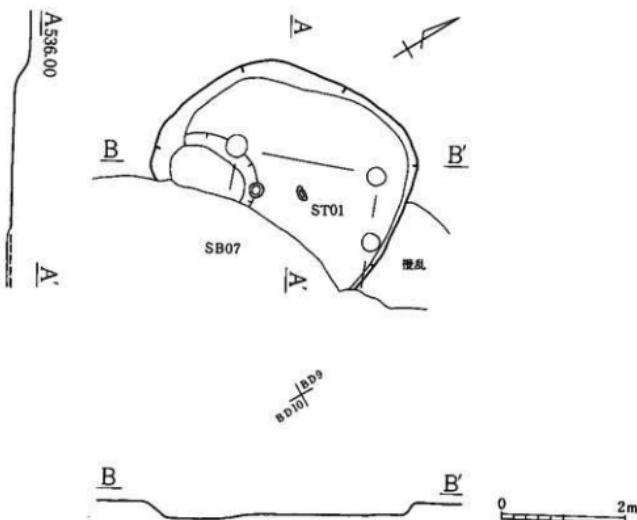


第7図 SB02

検出位置	B J17	覆土	暗褐色土
切合	切る 切られる	床面	軟弱
規模	プラン 規模m	住居内施設	主柱穴 貯藏穴 入口 炉形状 ・規模 竈
・	3.0m×2.57m		なし なし なし なし なし 特記事項
形状	主軸 壁高cm 状態		
	46cm ややなだらか		
出土遺物			
縄文時代中期初頭土器・押型文土器、いずれも覆土中から出土。			
石器は出土せず			
時期	縄文時代中期初頭	根拠	出土遺物より

第2表 SB02

(3) SB06 (第8図・第3表・第10図)

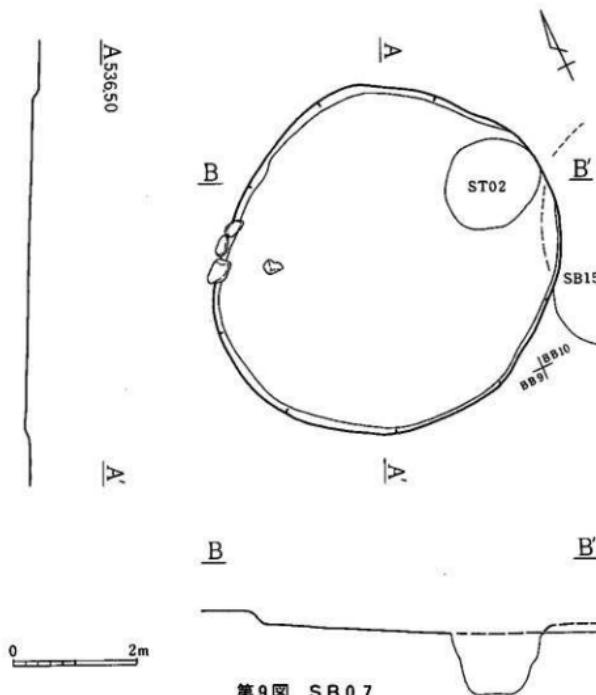


第8図 SB06

検出位置		BD 8	覆土	褐色土
切合	れる	なし	床面	軟弱
規模	プラン	橢円形	住居内施設	主柱穴
・形	規模m	4.25m × (3.5)m		貯藏穴 なし
状	主軸			入口 なし
状	壁高cm	16cm	炉	形狀
態	ややなだらか		・規模	
出土遺物				
縄文時代早期後半条痕土器 黒曜石製フレイク・チップ少量				
時期	縄文時代早期後半	根掘	出土遺物より	

第3表 SB06

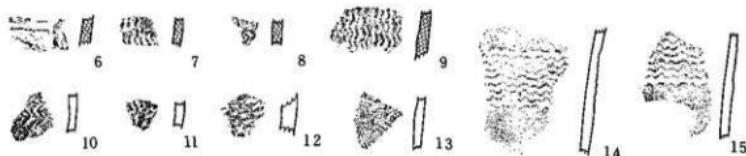
(4) SB07 (第9図・第4表・第10図)



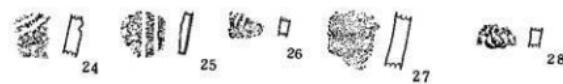
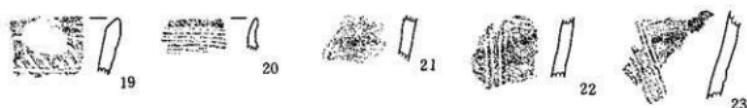
第9図 SB07

検出位置		BB9・BC9		覆土		褐色土
切合	切る	SB06・SB18		床	面	軟弱
規模	プラン	ST01・ST02		主柱穴	不明	
形狀	壁高cm	円形 5.56m×5.12m 22cm		貯藏穴	なし	
	状態	ややなだらか		入口	なし	
				炉形状		
				・規模		
				竈	特記事項	
出土遺物						
縄文時代前期前葉東海系土器 黒曜石製フレイク						
時期	縄文時代前期前葉		根拠	出土遺物より		

第4表 SB07



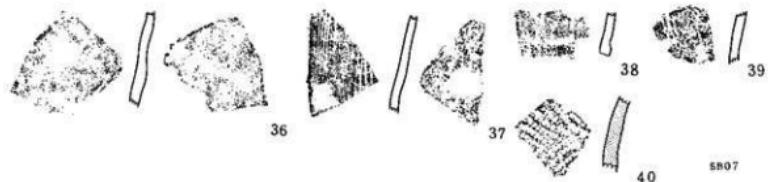
SB01



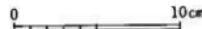
SB02



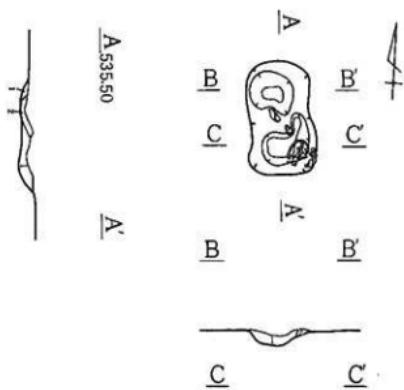
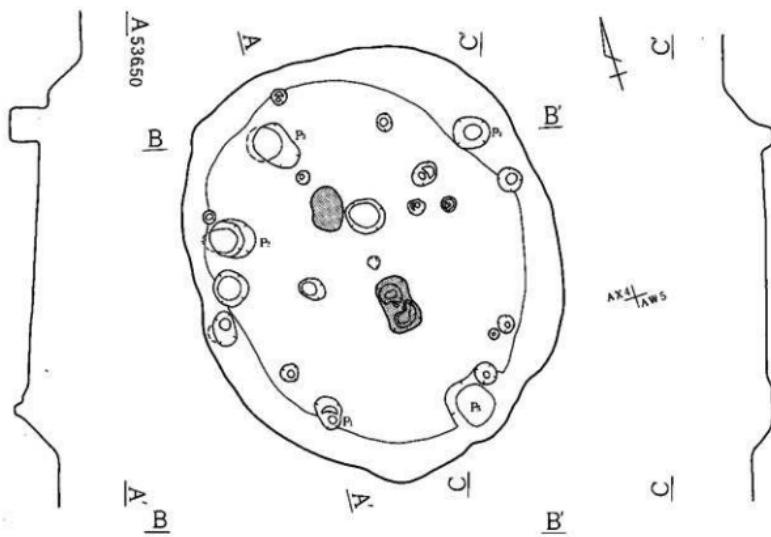
SB06



SB07



第10図 SB01~07出土遺物



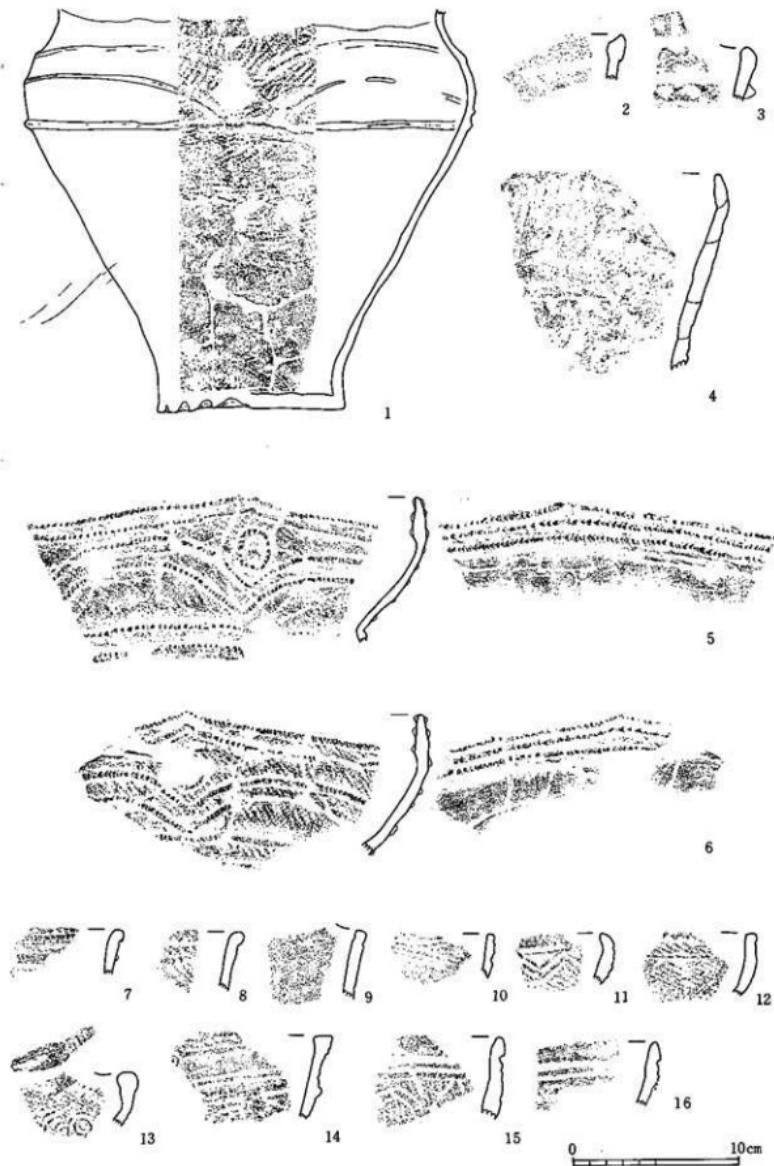
1. 赤褐色土、燒土
2. 黑褐色土、灰、炭化物多量、土器含

第11図 SB10

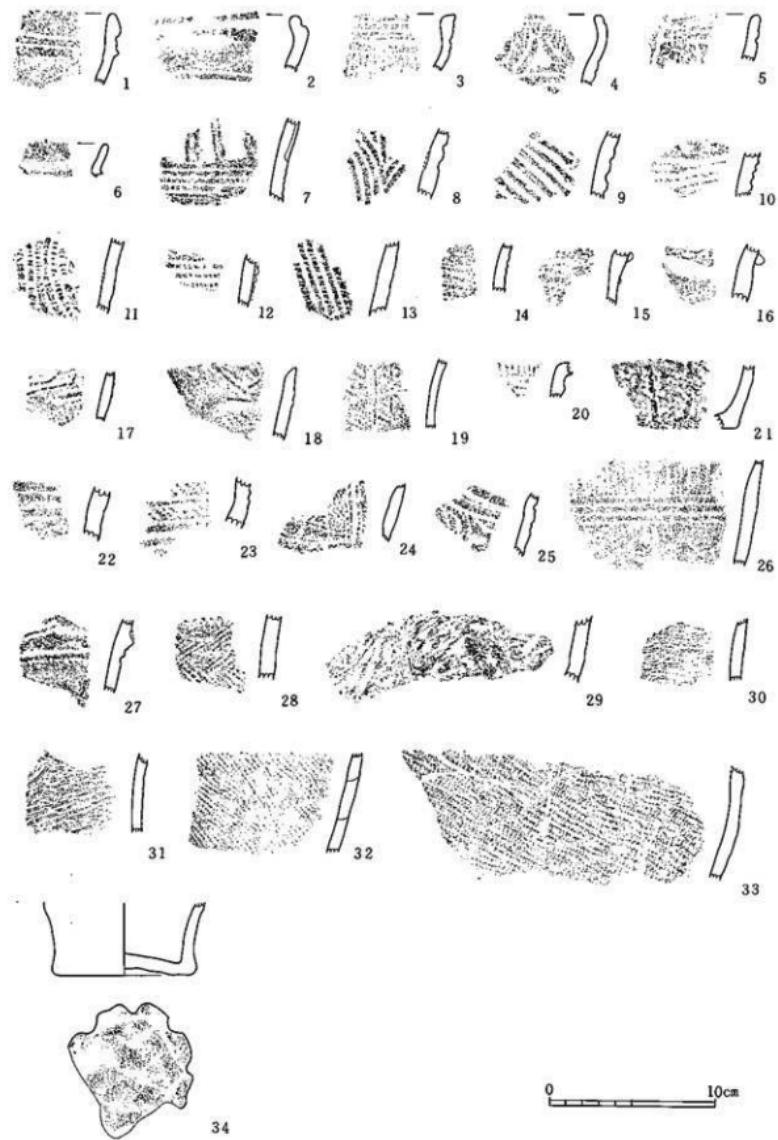
## (5) (第11図・第5表・第12~15図)

検出位置		B X 3・B Y 3	覆土	黒褐色土	
切合			床面	北半分貼床	
切られる			主柱穴	P 1 から P 5	
規模		プラン 楕円形	貯藏穴	なし	
規模m		6.85m×5.73m	入口		
・主軸	主軸	N20° E	炉形状	新旧2カ所	
			・規模	新(93cm×47cm) 旧(69cm×48cm)	
壁高cm		53cm	竈	特記事項 新炉は土器埋設炉	
形状		なだらか			
出土遺物					
縄文時代前期終末大歳山式・十三菩台式・中期初頭五傾ケ台式					
打製石斧・石鎌など					
特記事項					
大歳山式の土器埋設炉					
時期	縄文時代前期終末	根掘	出土遺物より		

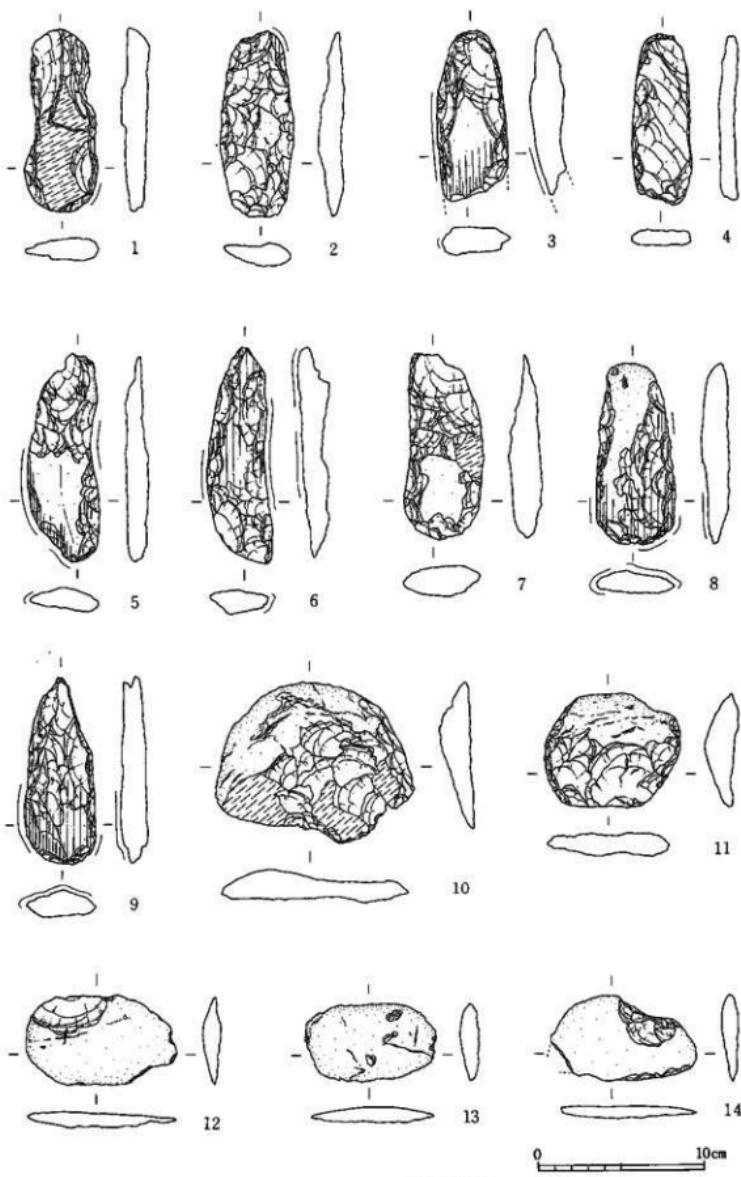
第5表 SB10



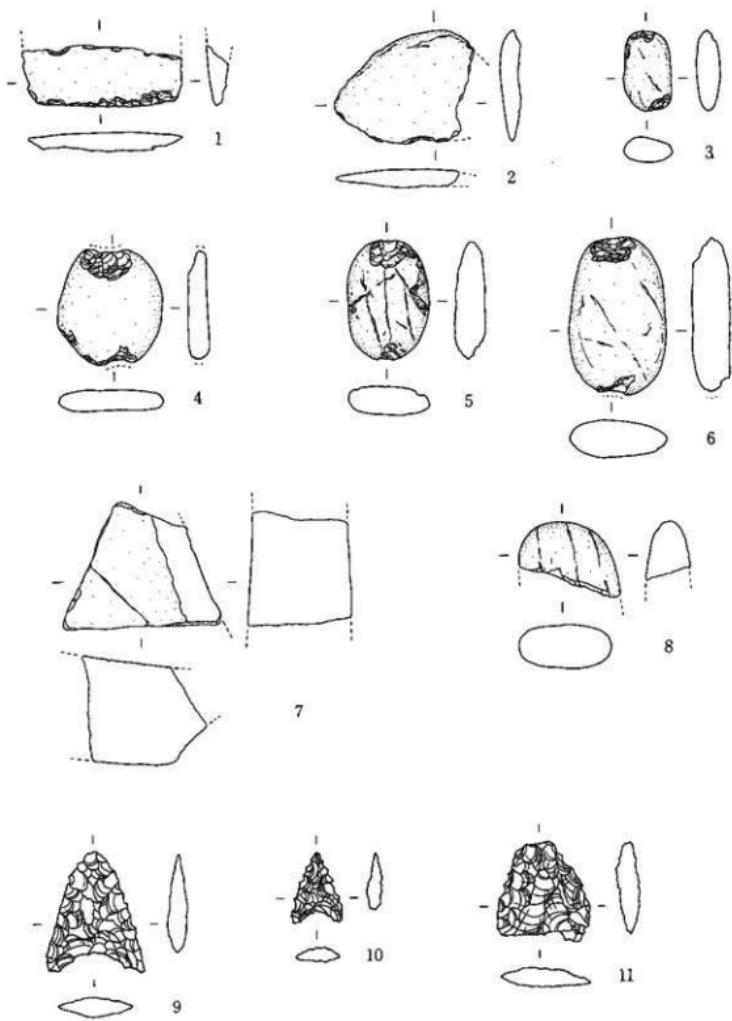
第12図 SB 10 出土遺物(1)



第13図 SB 10 出土遺物(2)

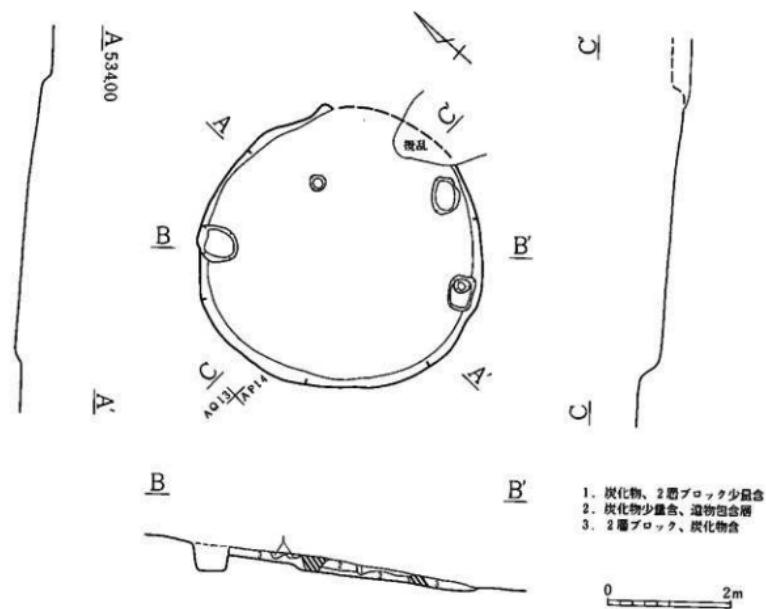


第14図 SB10出土遺物(3)



第15図 SB10出土遺物(4)

(6) SB13 (第16図・第6表・第22図)

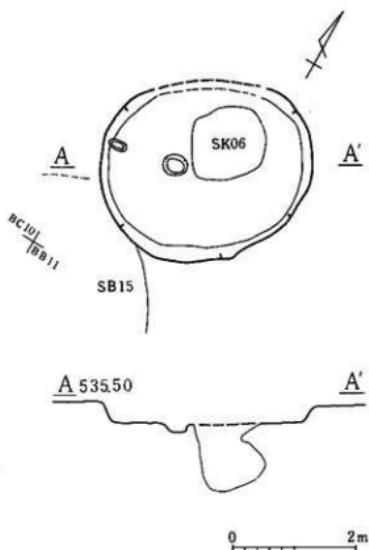


第16図 SB13

検出位置		AP15・AQ15	覆土		3層
切	る		床	面	軟弱
合	切られる		住	主柱穴	不明
規	プラン	円形	居	貯藏穴	なし
模	規模m	4.64m×4.46m	内	入口	
・	主軸		施設	炉形狀	
形	壁高cm	30cm		・規模	
状	状態	なだらか		竈	特記事項
出土遺物					
縄文時代中期最終末結節縄文を施す土器					
時	期	縄文時代中期最終末	根拠	出土遺物より	

第6表 SB13

(7) SB14 (第17図・第7表・第22図)

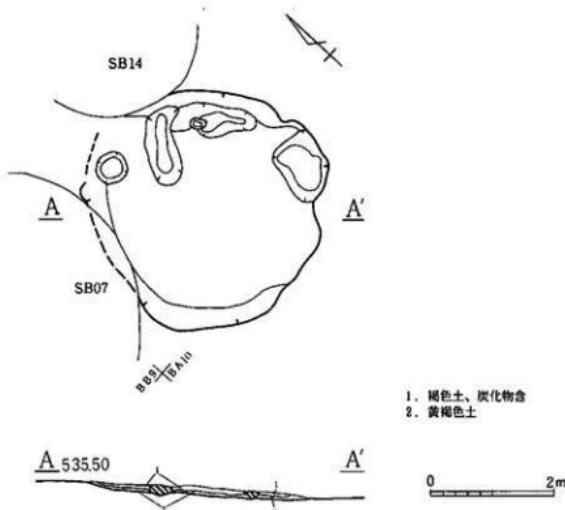


第17図 SB14

検出位置	BD11	覆土	褐色土
切る		床	軟弱
合		面	
切られる	S T02・SB15	住居内施設	主柱穴 不明
規	橢円形		貯藏穴 なし
模			入口
規模m	3.43m×2.85m		
・			炉形状
主軸			・ 規模
形			
壁高cm	32cm		竈 特記事項
状態	なだらか		
出土遺物			
縄文時代土器片(細片) 少量(図示せず)			
黒曜石フレイク 少量			
時期	不明	根拠	

第7表 SB14

(8) SB15 (第18図・第8表)

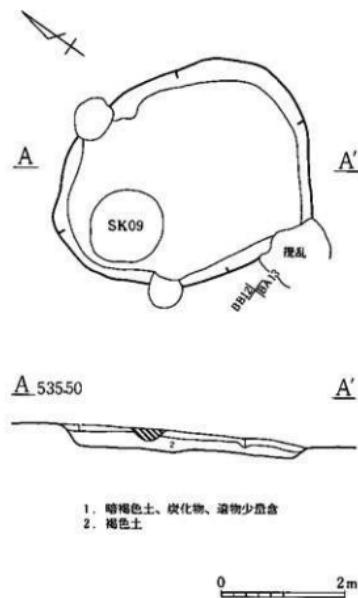


第18図 SB15

検出位置		BB11	覆土 2層	
切	る		床	面 軟弱
合	切られる	SB14	住 居 内 施 設	主柱穴 不明
規	プラン	不整形		貯藏穴 なし
模	規模m	3.81m×3.35m		入口
・	主軸		炉	形狀
形	壁高cm	10cm	・	規模
状	状態	なだらか	竈	特記事項
出土遺物				
縄文時代土器片(細片) 少量(図示せず)				
時 期	不明	根 拠		

第8表 SB15

(9) SB16 (第19図・第9表)

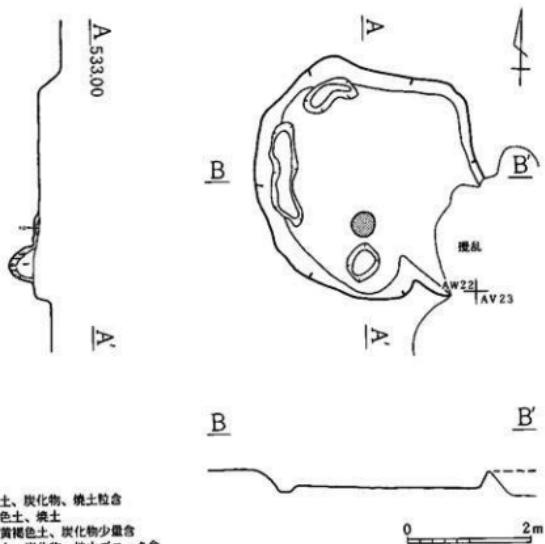


第19図 SB16

検出位置		BB13・BC13	覆土	2層
切合	切る		床面	軟弱
規模	SK09		主柱穴	不明
・	プラン	楕円形	貯藏穴	なし
形	規模m	4.30m×3.32m	入口	
状	主軸		炉形狀	
・	壁高cm	34cm	・規模	
状態	なだらか		竈特記事項	
出土遺物				
縄文時代土器片（細片）少量（図示せず）				
時期	不明	根拠		

第9表 SB16

(10) SB17 (第20図・第10表・第22図)

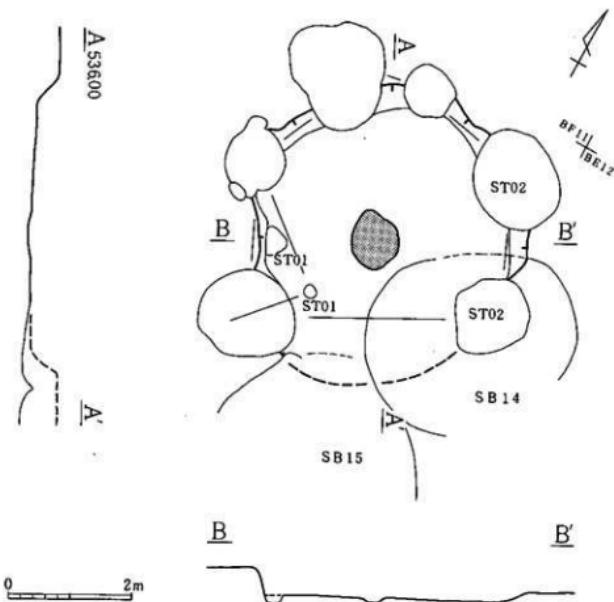


第20図 SB17

検出位置		AX21・AX22	覆土		黒褐色土
切 合	切る	SD01	床	面	軟弱
	切られる		住 居 内	主柱穴	不明
規 模	プラン	椭円形		貯藏穴	なし
.	規 模m	3.65m × 3.65m		入 口	
形 状	主 軸		炉 形 状	地床炉	
	壁 高cm	36cm	・ 規 模	40cm × 36cm	
状 態	状 態	なだらか	竈 特記事項		
出土遺物					
縄文時代前期後半十三苔台式 黒曜石フレイク					
時 期	縄文時代前期後半		根 抛	出土遺物から	

第10表 SB17

(11) SB18 (第21図・第11表・第22図)



第21図 SB18

検出位置	BD10・BE10	覆土	黒褐色土
切る		床面	軟弱
合	SB15・ST02	主柱穴	不明
規	プラン 楕円形	貯藏穴	なし
模	規模m 4.8m × 4.35m	入口	
・		炉	地床炉
形	主軸	・規模	95cm × 76cm
状	壁高cm 54cm	竈	特記事項
態	なだらか		

出土遺物

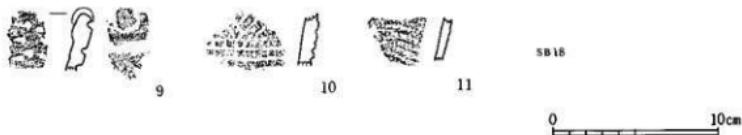
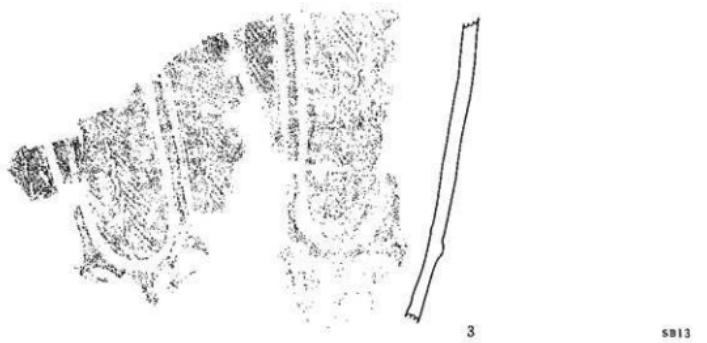
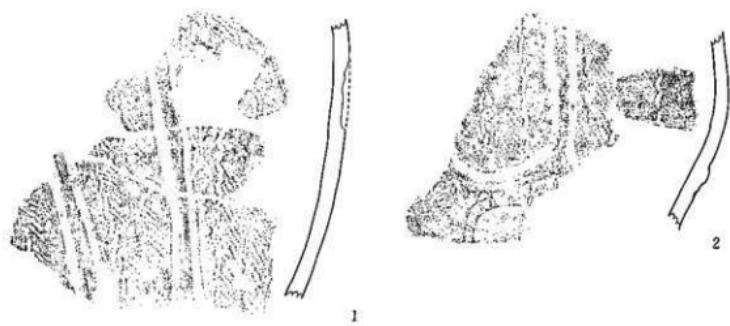
縄文時代前期前葉東海系土器・前期終末十三貫台式

黒曜石フレイク

時 期 縄文時代前期前葉

根 抱 出土遺物・ST02との切り合い関係

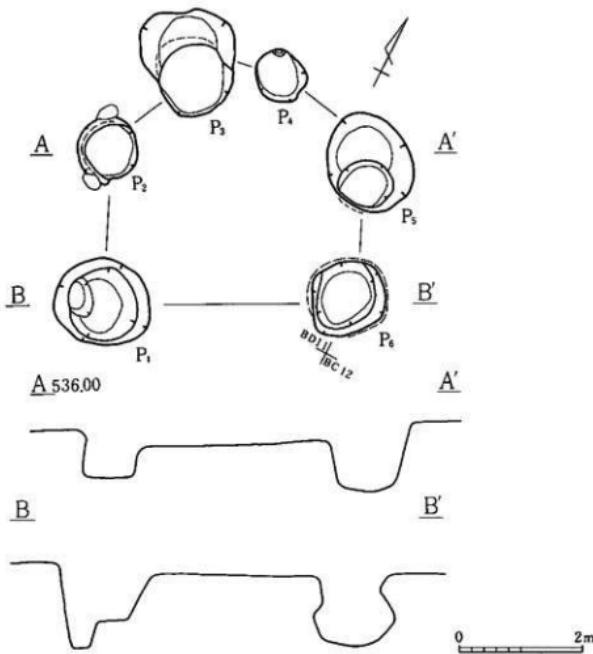
第11表 SB18



第22図 SB13～SB18出土遺物

## 2. 縄文時代の大型建物址

### (1) ST02



第23図 ST02

(位置) BE11を中心検出した径1m以上の掘方をもつ6本の柱穴で形成されている。

(切り合い) SB18が人為的に埋められた後に柱穴を掘っており、P1はSB07をP2はSB07・06をP6はSB14を切っている。またST01のP6はP2の覆土にあった。

(規模・形態) 方形を基調とした建物であるものと考えられる。とすれば、P2・3・5・6の4本を側柱と下、1×1間のものにP1・4の棟持の柱がついたものと判断できる。

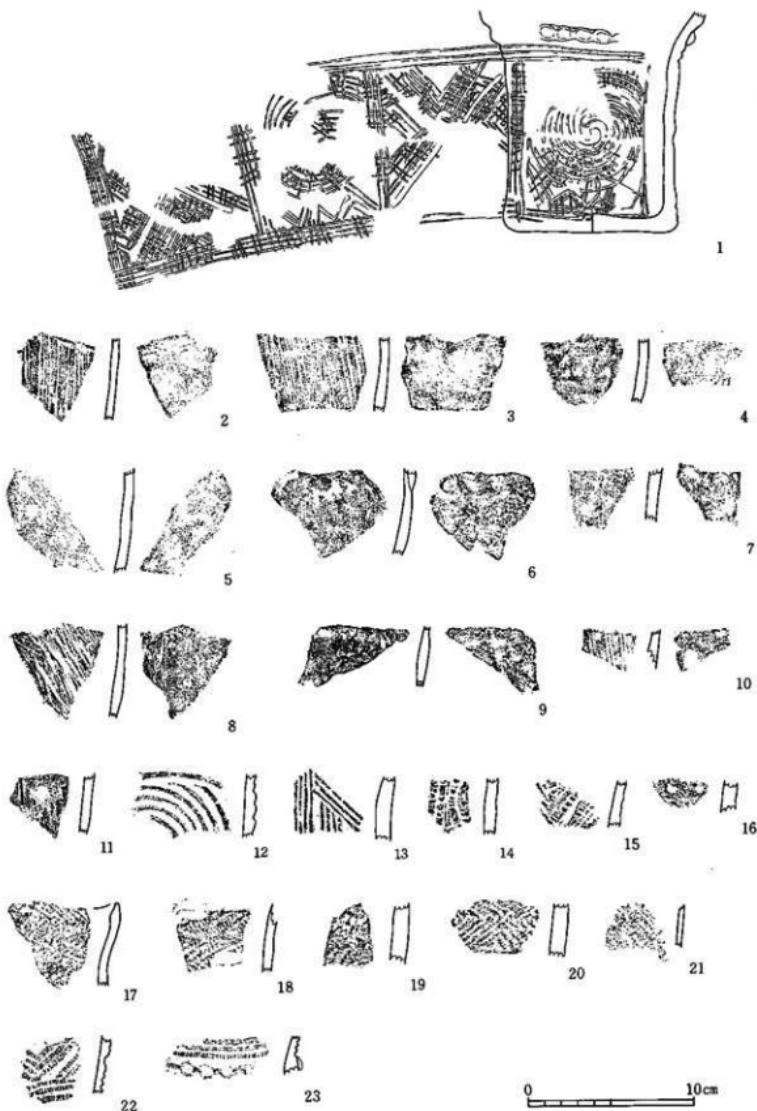
柱間は桁行で4.4m梁行で2mとかなり広いものである。柱穴の深さはまちまちであるがいざれも1mを越えている。平面形はほぼ円形であるが断面は袋状を呈している。

(出土遺物) P2から縄文時代前期最終末の土器である十三菩提併行の深鉢が出土しており、建物の時期判断の材料となった。他に、縄文時代前期前葉の土器が出土しているものこれらはこの建物が切っているSB18(時期は縄文時代前期前半)の混入と見られる。

(時期) 前述の土器の時代、縄文時代前期最終末と見てよい。

(性格) 掘立柱建物址の形態をとることから一般の住居ではないものと見られる。

(類例) 飯田市内において、当該時期の建物址は類例を見ない。縄文時代中期の遺跡、下の原遺跡、北田遺跡、中村中平遺跡、三尋石遺跡等において確認されているが、いずれも2×1間の建物址である。



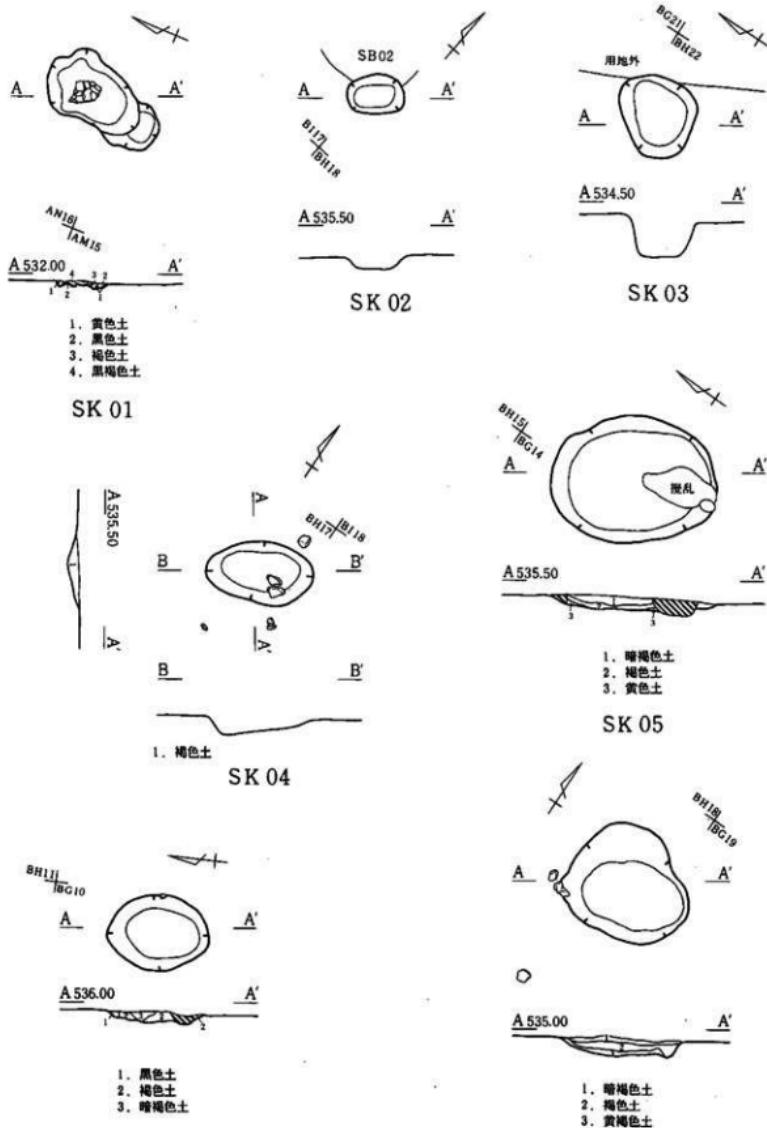
第24図 S T 0 2 出土遺物

### 3. 縄文時代の土坑（第25～27図・第12表・第34～36図）

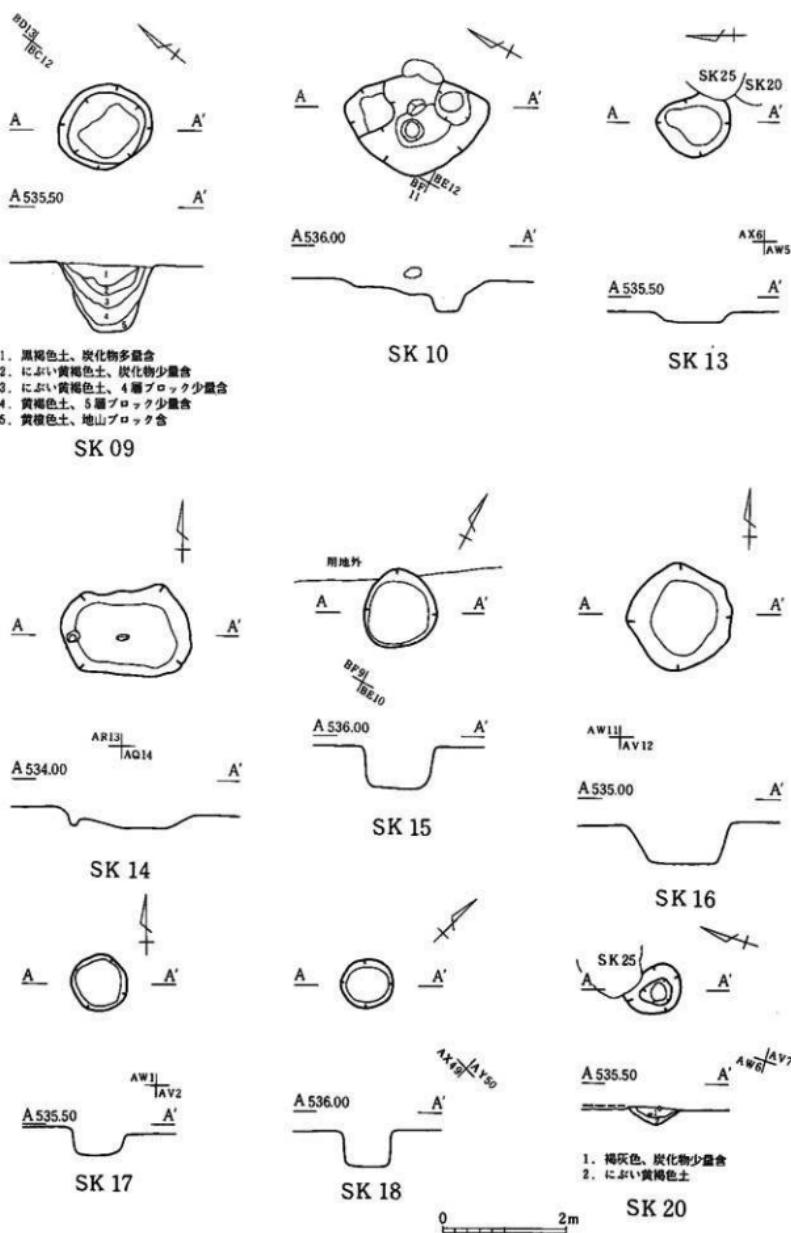
本調査区内からは計25基の土坑が確認されており、これらの多くから少量の遺物が確認されている。時期別に見ると、縄文早期が2基、縄文前期が10基、縄文中期が1基、縄文晩期が1基となる。各土坑における遺物の出土状態については、ほとんどが土坑底面から浮いた状態で出土しており、遺物と土坑の関係は不明確である。しかし、SK01では縄文晩期水口式の深鉢が横位にすえられており、覆棺墓としての機能が推定される。またSK14及び17からはそれぞれ縄文早期の深鉢形土器が1個体出土しており土坑の性格を考える上で注意されなければならないだろう。また、土坑の覆土に注目するとSK09・20・23には炭化物が混入しており、SK05には焼土がみられる。こうした特徴を持つ土坑は後述する集石と密接な関係にあると思われる。またSK26はその形態から落し穴としての機能も推定されよう。

第12表 土坑観察表

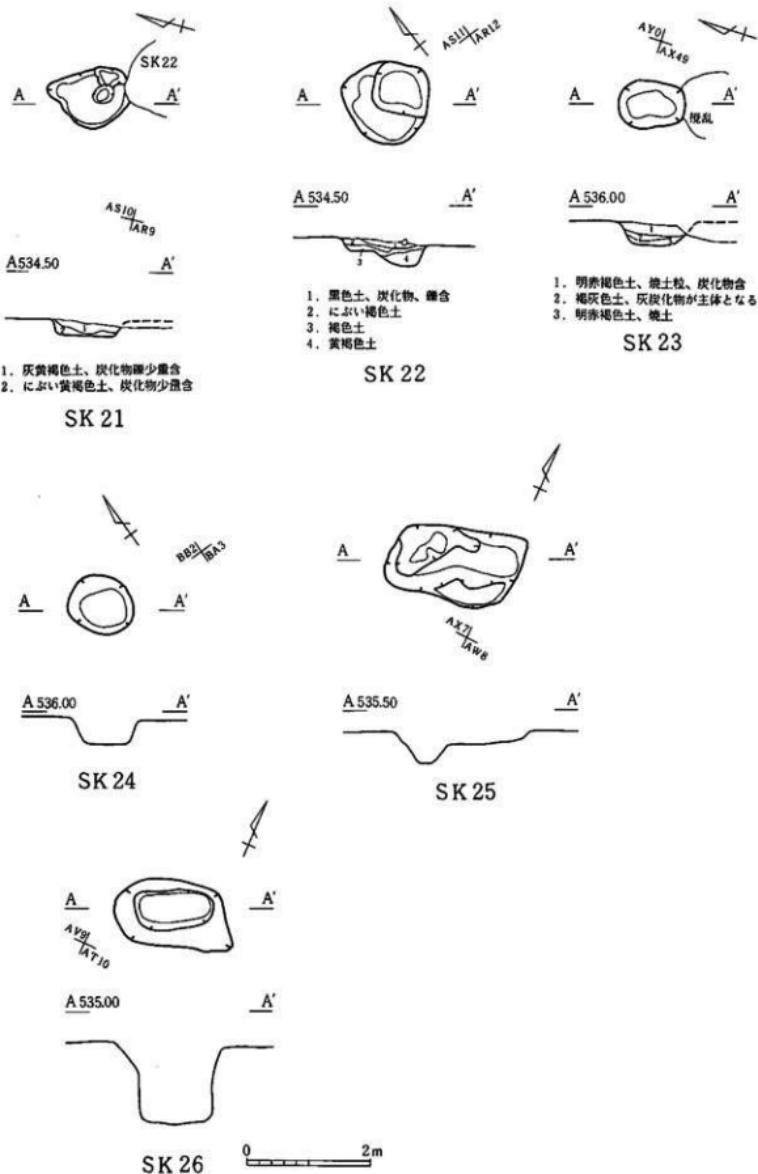
土坑No	図版No	規模(長×短×深さ)	形 態	覆 土	時 代	備 考
01	第25図	200×90×12	不整形	4 層	縄文晩期	覆棺墓と考えられる
02	第25図	90×60×21	不整形	褐色土	縄文前期	
04	第25図	170×100×32	楕円形	褐色土	縄文前期	
05	第25図	260×200×21	楕円形	3 層	不 明	焼土混入
06		×	×			S T02 ピット
07	第25図	162×120×23	楕円形	3 層	縄文前期	
08	第25図	208×187×28	楕円形	3 層	縄文前期	
09	第26図	150×134 112	楕円形	5 層	縄文前期	炭化物混入
10	第26図	232×158×53	不整形	褐色土	縄文前期	
13	第26図	120×94×17	不整形	黒褐色土	不 明	
14	第26図	206×138×35	不整形	褐色土	縄文早期	
15	第26図	127×113×67	楕円形	褐色土	縄文前期	
16	第26図	175×90×12	不整形	褐色土	縄文前期	
17	第26図	90×80×46	楕円形	褐色土	縄文早期	
18	第26図	82×74×62	楕円形	褐色土	縄文前期	
20	第26図	90×80×30	不整形	黒褐色土	不 明	炭化物混入
21	第27図	130×98×30	不整形	2 層	縄文中期	炭化物混入
22	第27図	140×140×45	不整形	4 層	不 明	炭化物混入
23	第27図	108×72×38	不整形	3 層	不 明	炭化物混入
24	第27図	104×92×46	不整形	黒褐色土	縄文前期	
25	第27図	220×115×53	不整形	黒褐色土	不 明	
26	第27図	185×110 132	不整形	黒褐色土	不 明	



第25図 SK 01~08



第26図 SK 09~20



第27図 SK 21～26

#### 4. 繩文時代の集石（第28図～第33図・第36図～第37図）

##### (1) S I 01 (第28図・第36図8～18)

(位 置) B E - 11区。S T02のP 5と重複し、S T02より新しい。掘り込みは明確に見られない。

(平 面 形) 約0.9m<sup>2</sup>にわたって散漫に分布し、意図的な配置は見られない。集石の構成礫は19個と少なく、本来の形状は不明である。

(礫の状態) 構成礫の多くは長径10cm程度で、僅かに細かな破碎礫が認められる。礫のほとんどに加熱による赤化が認められる。

(出土遺物・時期) 周辺及び内部から縄文時代前期終末の土器が出土している。（第36図）

##### (2) S I 02 (第28図)

(位 置) B A - 7区。S T01と重複し、S T01より古い。

(平 面 形) 長径約1m・深さ約0.25m程度の楕円形の掘り込み内に、16個ほどの礫が分布する。

(礫の状態) 構成礫の大半が細かな破碎礫で、長径10cm程度の礫が少量見られる。いずれも加熱による赤化が認められるものが多い。礫は、掘り込み上面から検出されている。

(出土遺物・時期) 出土遺物は見られず、時期不明である。

##### (3) S I 03 (第28図)

(位 置) B B - 8・9区

(平 面 形) 長径0.7m・深さ0.3mの楕円形の掘り込みを有する。構成礫数は11個で、径30cmの礫を中心にして、これを囲むように掘り込み内部に礫が置かれる意図的な配置がみられる。

(礫の状態) 構成礫のすべてに加熱による赤化および破碎がみられる。

(出土遺物・時期) 出土遺物は見られず、時期不明。

##### (4) S I 05 (第28図・第36図19～22)

(位 置) A V - 7区。南側にS I 28が近接し、調査区西端付近に位置する。

(平 面 形) 長径約1m・深さ0.3mの楕円形の掘り込みをもち、掘り込み内に44個の礫が集中して分布する。

(礫の状態) 矽の多くが5cm程度の破碎矽と、その母岩と考えられる15cm程度の破碎矽から構成される。構成矽のすべてに加熱による赤化が認められる。掘り込みの覆土1層に集中し、僅かに炭化物が認められる。

(出土遺物・時期) 集石内外から、押型文土器および無文の土器片が出土。（第36図）

##### (5) S I 06 (第28図)

(位 置) A Y - 0・A Y - 1区。西側にS I 10・東側にS B 10が近接する。

(平 面 形) 長径1m・深さ0.1m程度の浅い掘り込み上面および周辺に65個の矽が散漫に分布

する。

- (礫の状態) 5cm以下の破碎礫と、その母岩と考えられる10cm以上の大型の礫から構成される。構成礫の大半に加熱による赤化と破碎が見られる。
- (出土遺物・時期) 出土遺物は見られず、時期不明。

(6) S I 07 (第29図)

- (位置) A U-20区。南東にS I 08・30が近接する。遺構のはば1/3が搅乱によって破壊されており、当初の形状は失われている。
- (平面形) 長径約2mのはば円形を呈する掘り込みを持ち、上面に36個の礫が散漫に分布する。
- (礫の状態) 5cm以下の破碎礫と最大40cmの大型の礫から構成される。中・小型の礫は加熱による赤化と破碎が認められるが、大型の礫は赤化等みられない。
- (出土遺物・時期) 出土遺物はなく、時期不明。

(7) S I 08 (第29図)

- (位置) A U-20・A U-21区。S I 07・S I 30に近接する。遺構の1/4が搅乱によって破壊されており、当初の形状は不明である。
- (平面形) 長径1.5m程度の掘り込みが認められるが、礫の約半分が搅乱により移動している。
- (礫の状態) 最大30cmの大型の礫と5cm以下の破碎礫から構成される。大型の礫には赤化など見られず、小型の破碎礫にも赤化の観察されるものが少ない。
- (出土遺物・時期) 出土遺物はなく、時期不明。

(8) S I 09 (第29図・第36図23)

- (位置) B A-1区。S B16と重複し、S B16より新しい。
- (平面形) 長径0.9mのごく浅い楕円形の掘り込みが認められるが、礫の大半は掘り込み外に分布する。構成礫数は14個と少なく、散漫に分布する。
- (礫の状態) 長径10cm程度の礫が大半を占める。加熱による赤化は見られるが、破碎礫は少なく、ほぼ原形を保つ礫が多い。
- (出土遺物・時期) 集石内部から関西系の北白川下層式の破片が出土。縄文前期後半と考えられる。

(9) S I 10 (第29図)

- (位置) A Y-0区。S I 06に近接する。
- (平面形) 長径約1.2m・深さ0.1mの浅い楕円形の掘り込みを持つ。構成礫は15個と少なく、掘り込み内で散漫に分布する。
- (礫の状態) 径5cm程度の破碎礫が大半を占める。構成礫の大半に加熱による赤化が認められる。
- (出土遺物・時期) 出土遺物はなく、時期不明。

(10) S I 11 (第30図・第37図1~14)

- (位 置) BC-2・BC-3区。遺構の北半分が調査区外に延びる。
- (平 面 形) 残存長1.5mの不整形の掘り込みをもつ。調査区内の構成疊数は30個数えられ、掘り込み上面に散漫な分布を示す。
- (疊の状態) 径10cm程度の破碎疊が大半を占め、構成疊の大半に赤化が認められる。
- (出土遺物・時期) 集石内外より、貝殻条痕文土器が出土。縄文早期後半と考えられる。(第37図)

(11) S I 12 (第30図)

- (位 置) AX-22・23区。SB17に近接する。
- (平 面 形) 長径1.5m・深さ0.6mの楕円形の掘り込みを持つ。構成疊数は97個で、掘り込み上部から底部まで密に分布する。
- (疊の状態) 径10cm程度の破碎疊と、破碎疊の母岩と考えられる径30cm程度の大型の疊がみられる。掘り込み内部及び構成疊には炭化物が多量に付着する。破碎疊には加熱による赤化が顕著にみられる。
- (出土遺物・時期) 出土遺物はなく、時期不明。

(12) S I 13 (第29図)

- (位 置) AV-22区。SD01と重複し、SD01より古い。
- (平 面 形) 現存長0.8mのほぼ円形と推定される浅い掘り込みをもつ。構成疊数は22個で、掘り込み上面に密に分布する。
- (疊の状態) 長径15cm程度の疊と少数の破碎疊から構成される。構成疊の多くは赤化が見られない。
- (出土遺物・時期) 出土遺物はなく、時期不明。

(13) S I 14 (第29図)

- (位 置) BH-19・20区。SK08・03に近接する。
- (平 面 形) 直径0.9m・深さ0.2mのほぼ円形の浅い掘り込みをもつ。構成疊数は12個と少なく、疊は掘り込み1層中に入るものが多い。
- (疊の状態) 主に長径10cm以下の破碎疊から構成される。構成疊の多くは赤化がみられる。
- (出土遺物・時期) 出土遺物はなく、時期不明。

(14) S I 15 (第30図)

- (位 置) BF-10・11区。ST02に近接する。遺構南側1/3が搅乱により破壊されている。
- (平 面 形) 現存径0.9m・深さ0.2mの楕円形と推定される浅い掘り込みをもつ。構成疊数は20個で掘り込み上面に散漫な分布を示す。
- (疊の状態) 長径15cmの疊を主とし、径5cm程度の破碎疊も少量見られる。破碎疊には赤化が顕著に認められる。

(出土遺物・土器) 出土遺物はなく、時期不明。

(15) S I 16 (第30図・第36図24~27)

- (位置) A X - 9 + 10区。S I 19 + 27が近接する。搅乱により遺構北東側が約半分破壊されている。  
(平面形) 遺構の大半が破壊されているため、当初の形態は不明である。現存する構成礫数は40個で、長径40cmの大型の礫を中心に、径10cm以下の破碎礫が集中する。  
(礫の状態) 集石の中心と考えられる大型の礫の他はすべて破碎礫であり、赤化が認められる。  
(出土遺物・時期) 集石内外から条痕文土器が出土。縄文早期後半と考えられる。(第36図)

(16) S I 17 (第31図)

- (位置) A W - 10 + 11区。S I 27 + S K 16が近接する。  
(平面形) 約4m<sup>2</sup>にわたって散漫に分布する。意図的な配置は見られない。構成礫数は86個で掘り込みは見られないが、礫周辺に炭化物の平面的な分布が見られた。  
(礫の状態) 径10cm程度の破碎礫が主体であり、これを母岩とする5cm以下の破碎礫が少数見られる。礫の大半には加熱による赤化が認められる。  
(出土遺物・時期) 出土遺物はなく、時期不明。

(17) S I 18 (第31図・第37図15~19)

- (位置) A S - 11区。S I 21 + 22が近接する。  
(平面形) 長径1.7m・深さ0.3mの楕円形の掘り込みを持つ。構成礫数は52個で掘り込みほぼ中央に集中して分布する。掘り込み上面に大半の礫が集中するが、2層にも少量見られる。  
(礫の状態) 破碎礫は少なく、径20cm程度の礫が主体を占める。礫の大半に赤化が認められる。  
(出土遺物・時期) 集石内外から縄文前期終末の土器出土。

(18) S I 19 (第31図・第37図20)

- (位置) A X - 7 + A W - 7区。S K 19 + 20が近接する。  
(平面形) 直径0.7m・深さ0.2mのほぼ円形の掘り込みを持つ。構成礫数は17個で掘り込み中央に集中する。  
(礫の状態) 径10cm程度の破碎礫が主体となる。礫の周辺及び掘り込み中には径1cmほどの炭化物が集中する。礫には加熱による赤化が見られる。  
(出土遺物・時期) 集石付近から、無文土器出土。細片のため時期不明。

(19) S I 20 (第31図)

- (位置) A S - 11 + A T - 11区。S I 18が近接する。搅乱により遺構南側が僅かに破壊される。

- (平面形) 長径0.9m・深さ0.3mの楕円形の掘り込みを持つ。構成礫数は67個で掘り込み中央に集中するが、約3m<sup>2</sup>の範囲に散漫に広がる部分もみられる。
- (礫の状態) 径20cm程度の大型の礫が主体となり、周辺に5cm程度の破碎礫が少量見られる。礫は掘り込み上面に集中している。加熱による赤化の見られる礫は少ない。
- (出土遺物・時期) 出土遺物はなく、時期不明。

(20) S I 21 (第31図・第37図21~23)

- (位置) A Y - 8区。S T 02が近接する。搅乱により遺構南側が1/3ほど破壊される。
- (平面形) 現存径1m・深さ0.2mの円形と推定される掘り込みを持つ。現存礫数は17個で掘り込み内外に散漫な分布を示す。
- (礫の状態) 径10cm程度の破碎礫が主体となる。破碎礫の周辺には炭化物が僅かに見られる。
- (出土遺物・時期) 集石内外から縄文前期終末の土器片出土。(第37図)

(21) S I 22 (第32図)

- (位置) A Y - 5区。S B 10が近接する。
- (平面形) 長径約1.7m・深さ0.3mの不整形の掘り込みを有する。掘り込みは2カ所みられ、礫は双方にまたがり散漫に分布する。構成礫数は38個である。
- (礫の状態) 径10cm程度の破碎礫が主体となる。礫は掘り込み上面に集中し、炭化物が周囲に見られる。加熱による赤化が多くの礫に見られる。
- (出土遺物・時期) 出土遺物はなく、時期不明。

(22) S I 24 (第32図)

- (位置) A U - 5区。調査区南西端に位置する。S I 05・28が近接する。
- (平面形) 直径1.3m・深さ0.2mの円形の掘り込みを持つ。礫は掘り込みを中心に内外に広く散漫に分布する。構成礫数は49個である。
- (礫の状態) 直径10cm程度の礫が主体となり、周囲に5cm以下の破碎礫が少量見られる。礫・破碎礫共に赤化が認められる。
- (出土遺物・時期) 出土遺物はなく、時期不明。

(23) S I 25 (第32図・第37図24~26)

- (位置) A T - 10・11区。S K 25に切られる。
- (平面形) 深さ5cm程度の浅い掘り込みが若干みられる。礫は、掘り込み内に集中している。構成礫数は39個である。
- (礫の状態) 直径5cm程度の破碎礫が主体となる。礫周辺には少量の炭化物と共に土器片が出土。
- (出土遺物・時期) 集石内外より、押型文土器出土。(第37図)

(24) S I 26 (第33図)

- (位 置) B B - 24区。調査区東端に位置する。
- (平 面 形) 長径 1m・深さ 0.2m の掘り込みを持つ。礫は掘り込み内部に集中する。構成礫数は 37 個。
- (礫の状態) 径 10cm の礫が主体となり、径 30cm の大型の礫も少量見られる。いずれの礫にも加熱による赤化は見られない。
- (出土遺物・時期) 出土遺物はなく、時期不明。

(25) S I 27 (第33図)

- (位 置) A X - 9・10 区。S D 01 に切られる。攪乱により遺構南側が破壊される。
- (平 面 形) 長径 1.5m の楕円形の掘り込みを持つ。礫は掘り込み上面に散漫に分布する。構成礫数は 9 個と少なく、集石でない可能性もある。
- (礫の状態) 径 10cm 程度の礫が主体となる。礫に赤化は見られない。
- (出土遺物・時期) 出土遺物はなく、時期不明。

(26) S I 28 (第33図)

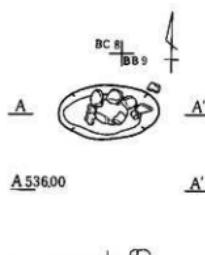
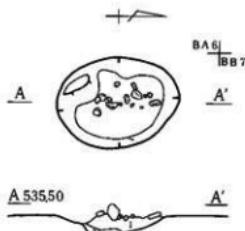
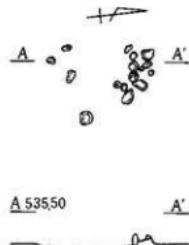
- (位 置) A U - 6・7 区。S I 05 に近接する。
- (平 面 形) 長径 1.5m・深さ 5cm 程度のごく浅い掘り込みを持つ。構成礫数は 18 個で、掘り込み内に散漫な分布を示す。
- (礫の状態) 径 5cm 程度の小礫が主体であり、破碎・加熱による赤化は見られない。
- (出土遺物・時期) 出土遺物はなく、時期不明。

(27) S I 29 (第33図・第37図 27, 28)

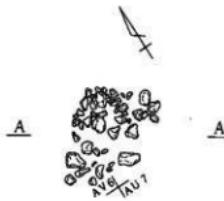
- (位 置) A T - 14 区。
- (平 面 形) 長径 1.2m・深さ 0.2m の不整形の掘り込みを持つ。構成礫数は 3 個と少なく、一ヶ所に集中する。配石である可能性も考えられる。
- (礫の状態) 径 15cm 程度の礫で構成される。礫周辺は焼土が分布し、礫も赤化が認められる。
- (出土遺物・時期) 集石外から時期不明の土器片出土。

(28) S I 30 (第33図)

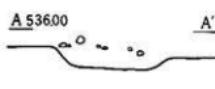
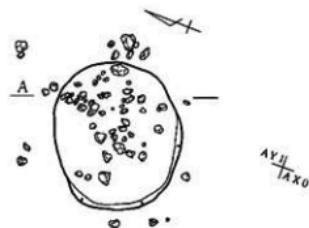
- (位 置) A T - 20 区
- (平 面 形) 長径 2m の不整形の掘り込みを持つ。構成礫数は 10 個で、掘り込み外に分布する。
- (礫の状態) 径 10cm 程度の礫で構成される。赤化などみられない。
- (出土遺物・時期) 出土遺物はなく時期不明。



1. 暗褐色土  
2. 墨褐色土、炭化物含



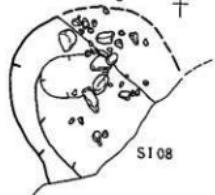
1. 暗褐色土、炭化物、礫多量含  
2. 底褐色土、炭化物、礫少量含  
3. にない黄褐色土、地山ブロック、炭化物少量含



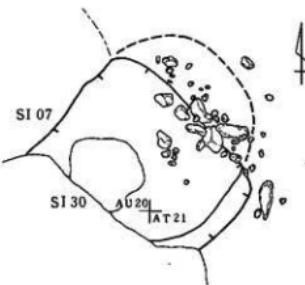
0                  1m

第28図 SI 01~06

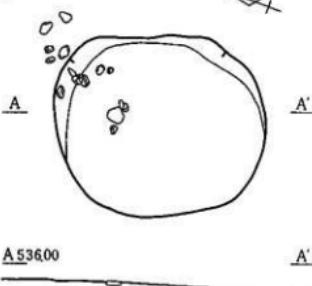
AV19  
IAU 20



SI 07

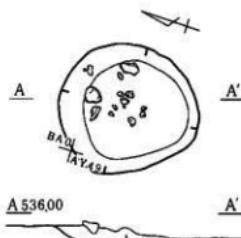


BB21  
BA1



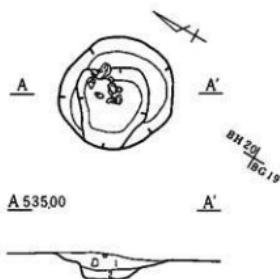
SI 09

AV21  
IAU 22



1. 棕色、炭化物、燒土含

SI 10

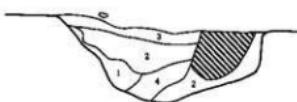
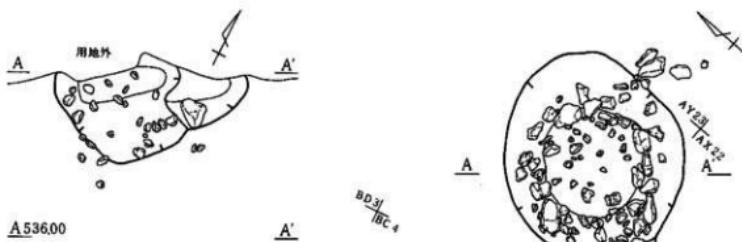


1. 赤棕色土、燒土  
2. 黃褐色土、炭化物少量含

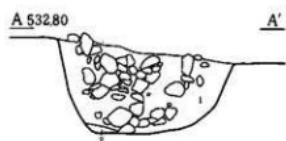
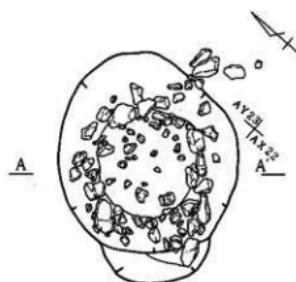
0 1m

SI 14

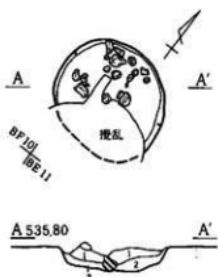
第29圖 SI 07~14



1. 灰黃褐色土、礦化物含
2. 黑褐色土、炭化物含
3. 暗灰色土、礦多量含
4. にぶい黄褐色土

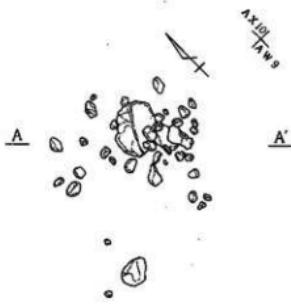


1. 黒色土、炭化物、礦多量含
2. 暗色土、炭化物、燒土含



1. 暗褐色土、炭化物含
2. 暗色土

SI 15



1. 灰黃褐色土、炭化物、礦含
2. にぶい黄褐色土、炭化物含



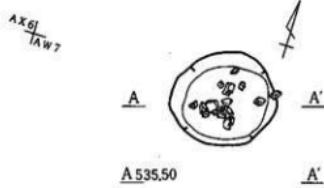
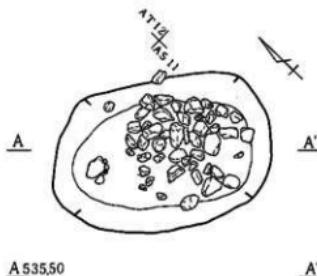
SI 16

第30図 SI 11~16



SI 17

AX II  
AW 12

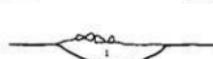


1. にぶい黄褐色土、炭化物、礫多量含

SI 18

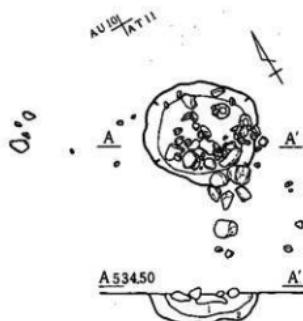
1. 黒褐色土、炭化物、礫多量含
2. 黒色土、炭化物多量含
3. 褐色土、炭化物少量含

SI 18



1. にぶい黄褐色土、炭化物、礫合

SI 19



1. にぶい黄褐色土、礫多量含
2. 褐色土、炭化物少量含

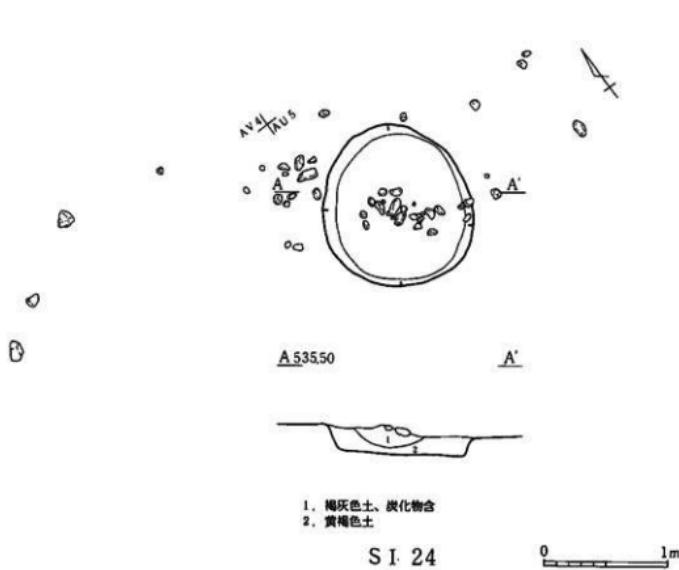
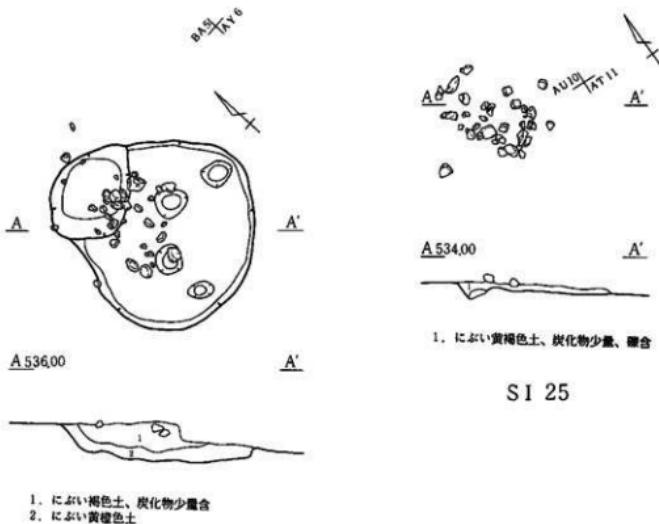
SI 20



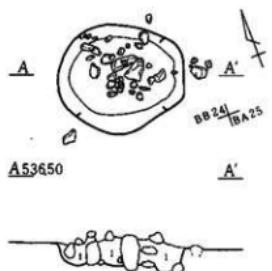
1. 黄褐色土、礫、炭化物含
2. 明褐色土、炭化物少量含

SI 21

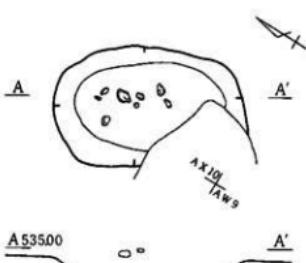
第31図 SI 17~21



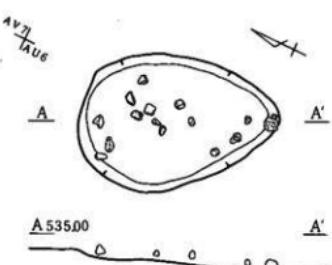
第32図 S I 22 ~ 25



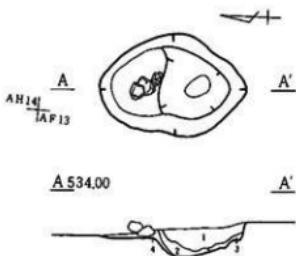
1. 明褐色、地山の混合  
SI 26



SI 27

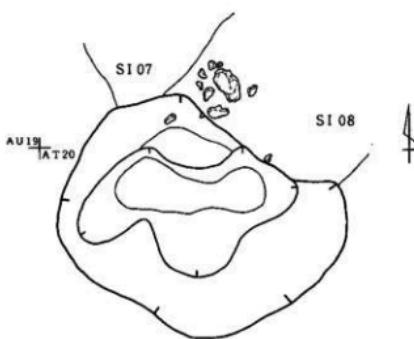


SI 28

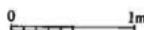


1. 明赤褐色土、焼土粒、■合  
2. 明黄褐色土、焼土多量合  
3. 黄褐色土  
4. 焼土、褐色土

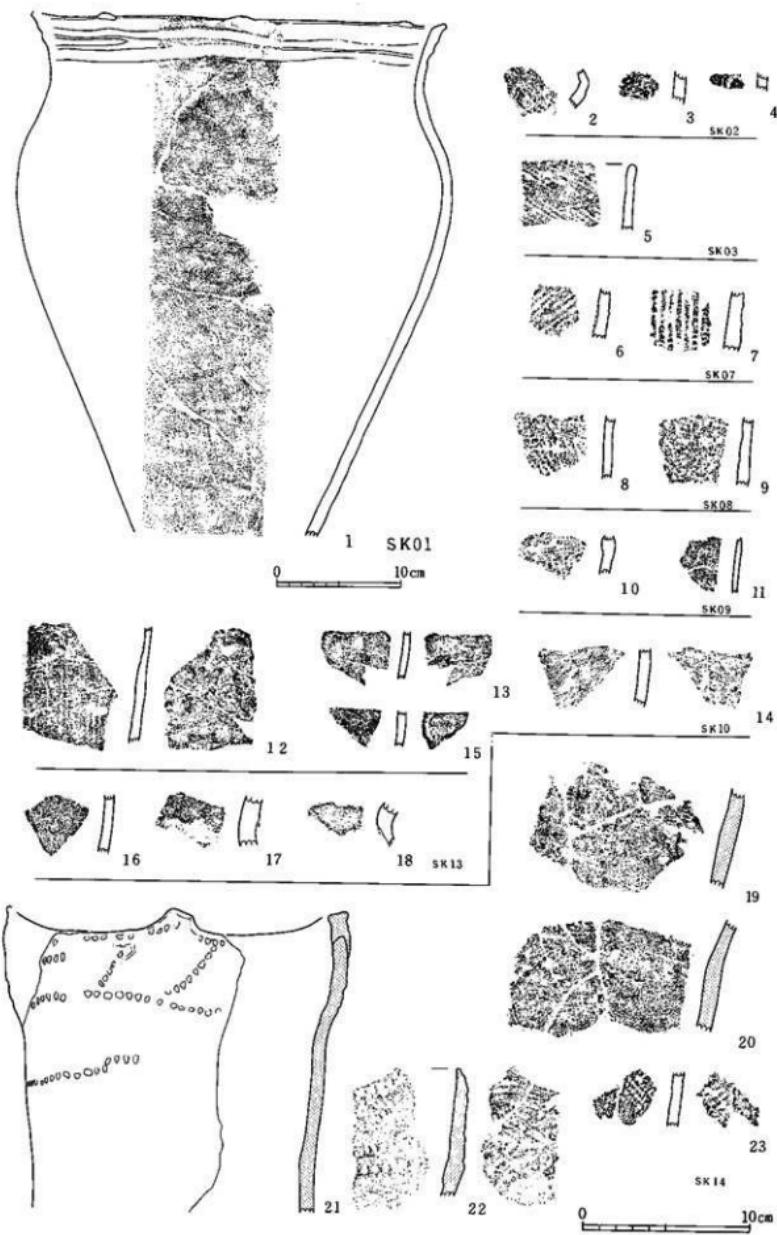
SI 29



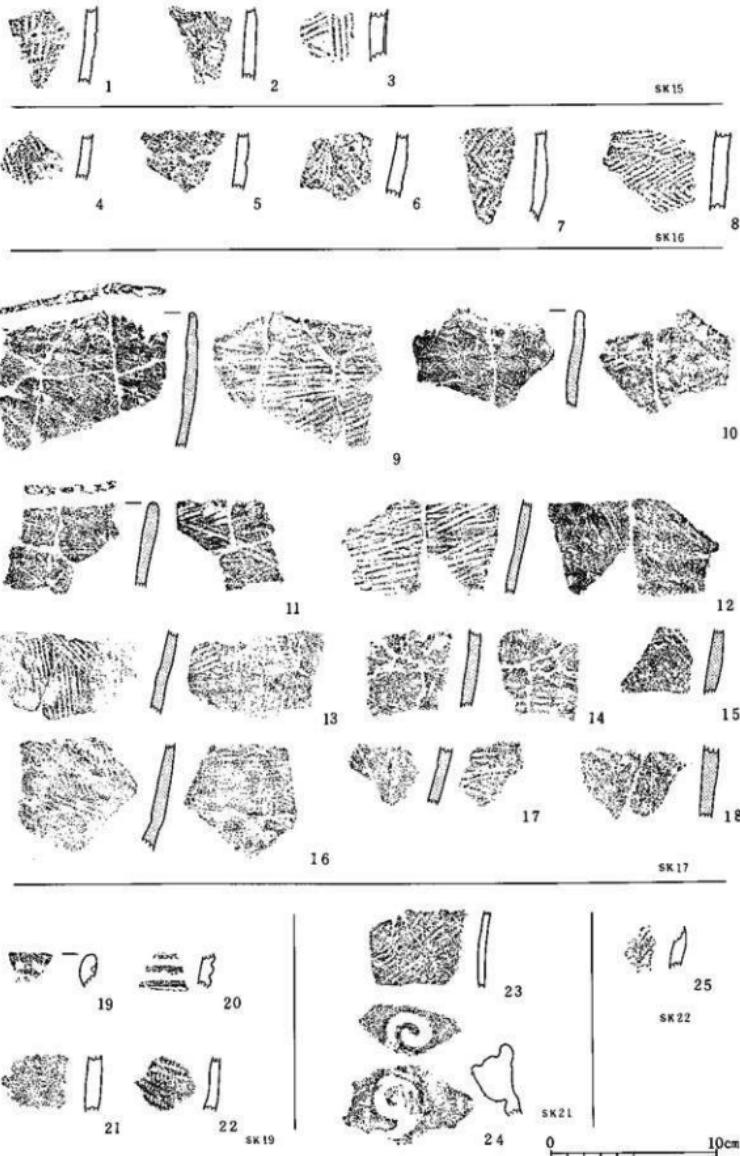
SI 30



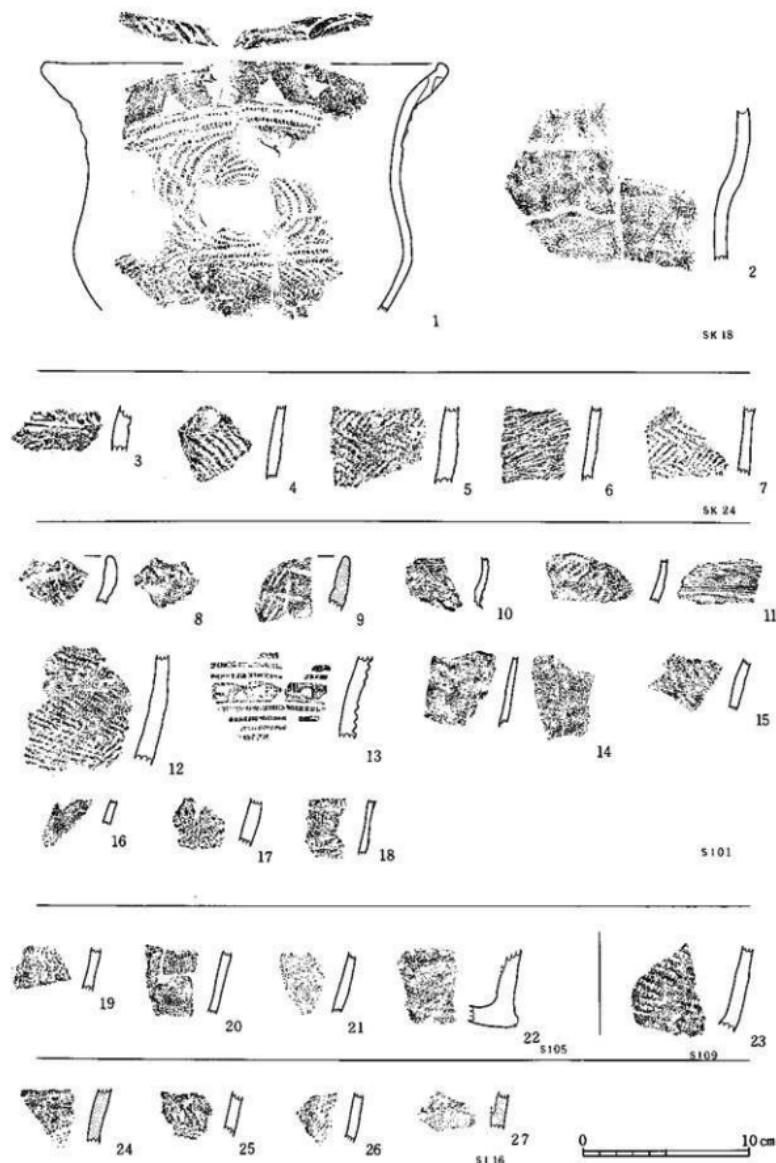
第33図 SI 26~30



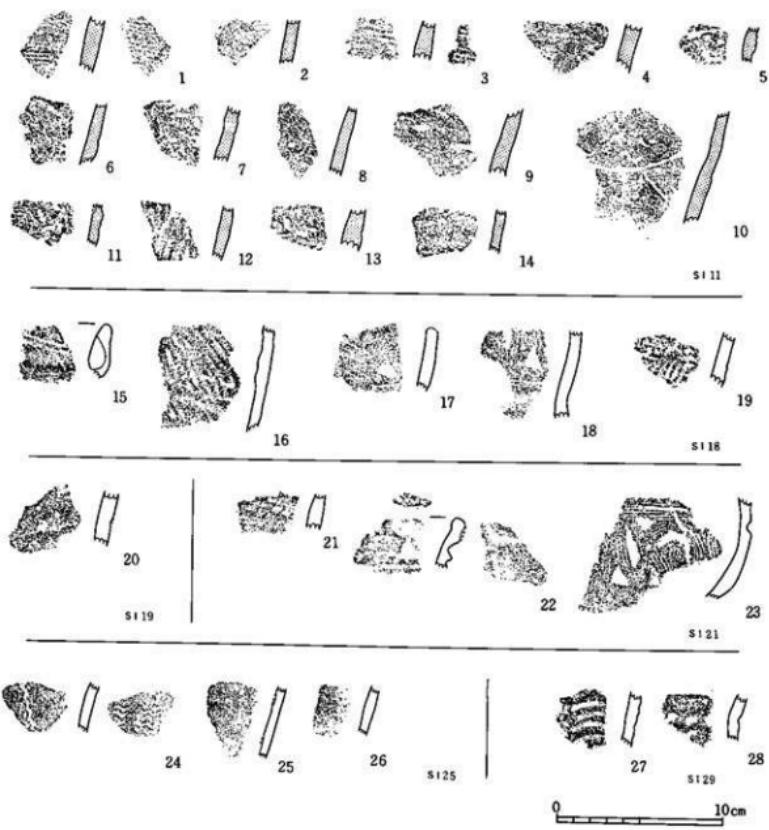
第34図 SK01~14出土遺物



第35図 SK 15~22出土遺物



第36図 SK 18・24・SI 01~16出土遺物



第37図 S111~29出土遺物

## 5. 中世の掘立柱建物址

### (1) S T01 (第38図)

(位 置) B C -10を中心直径20cm程度の穴と幅20cm長さ 2 mの溝があった。

(切り合い) S B06、S B07、S B18等をきっている。

(規模・形態) 全体では 9 × 5 mであるが、形態は東西に間数は異なる、規模のはば同じ建物を持つ。東側の建物は 4 × 1 間で 4.5 × 2.4 mの規模である。桁行方向の柱間は 90cm、梁行方向では 2.4 mであった。西側の建物の大きさはほぼ同じであるが、3 × 1 間と柱の数が異なる。桁行方向の柱間は 1.5 mと広いくが梁行方向はやはり 2.4 mであった。

また、中央に位置する幅20cmの 3 本の溝は長さは中央のものがごく短いが、1 m間隔で平行に配置されている。外側の 2 本の溝は 2 m長さがあり、位置的に見て東と西の建物をつなぐ廊下と判断できる。

(出土遺物) なし

(時期) 建物の構造から判断して中世のものである。

(性格) 柱穴のみの調査であるため、詳細はわからないが、一般の住居や倉庫とは異なり、特別な用途に使用された建物である可能性が高い。

(類 例) 飯田市内で中世の建物址が確認されている遺跡はかなりある。しかし、今回のように 2 棟の建物が廊下でつながっている例は今までに確認されていない。

## 6. 時期不明の溝

### (1) S D01 (第39図)

(位 置) A U -13から B B -14で地形に沿って延びている。東では用地外へ続くものと見られる。

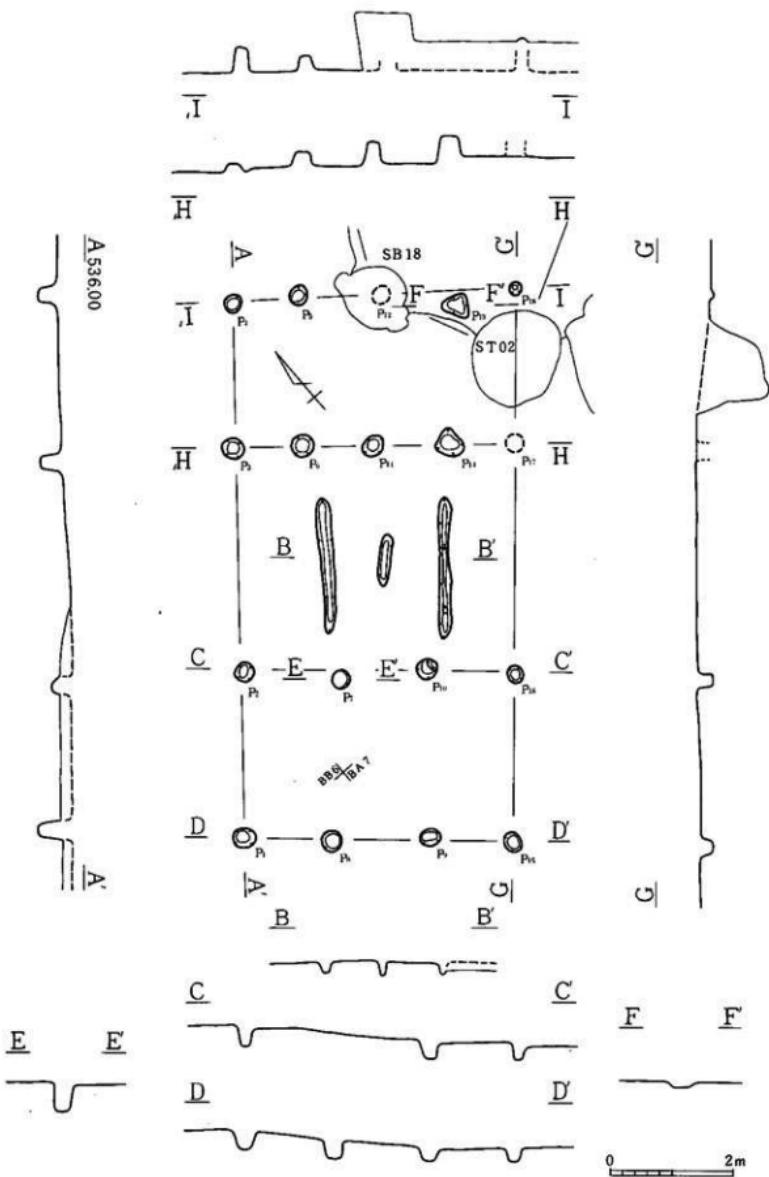
(切り合い) 始点付近で S I 12を切っている。用地境付近で S B17と重なっていたが一緒に掘り下げたため、新旧関係は不明である。

(規模・形態) 西から東へ向かっており、この溝の幅は始点付近で 64cm、用地境では 128cmと広くなる。調査できた部分での長さは 12.2 mであった。どの部分でも幅は異なるものの掘り方は浅く、壁の立上がりは緩やかである。

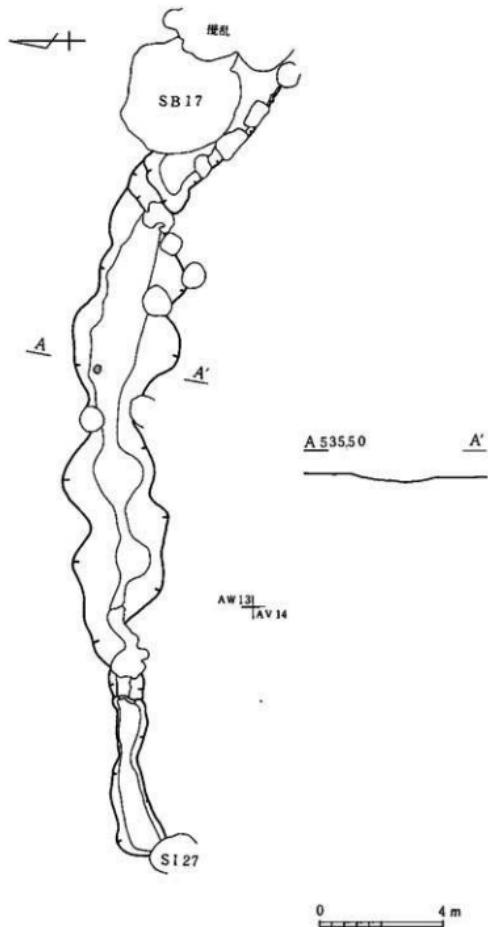
(出土遺物) 細かい土器片がいくつか出土しているが、混入の可能性が高い。

(時期) 出土遺物が細片のため不明である。

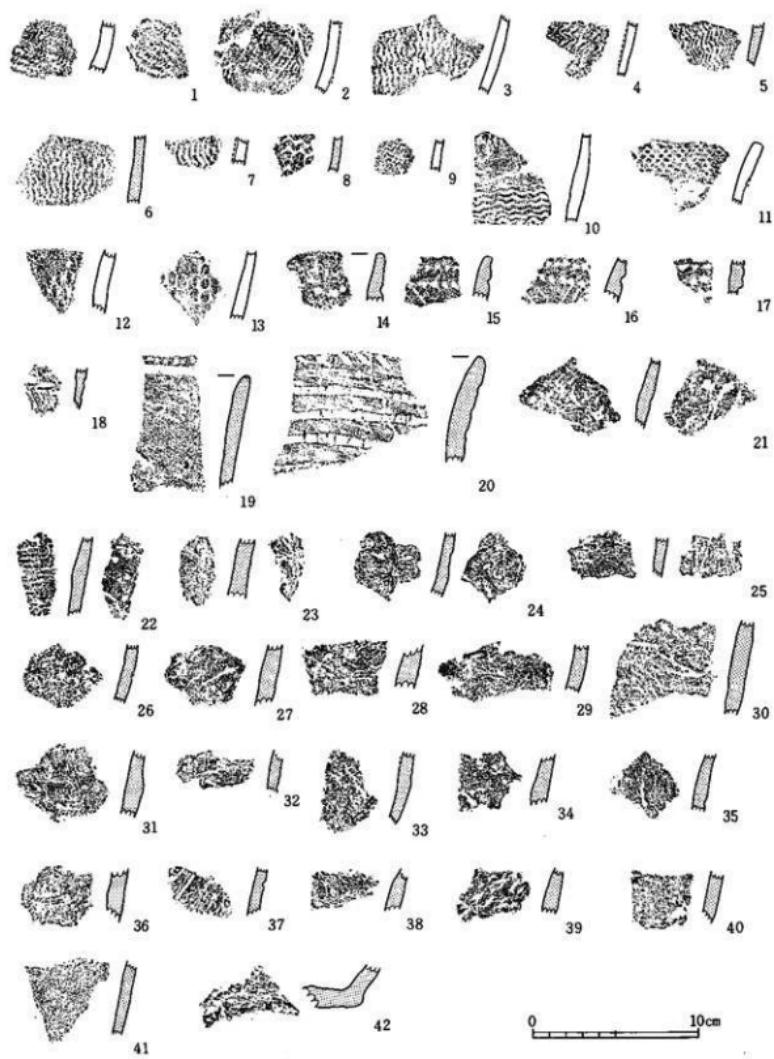
(性格) 人為的に掘られたものではなく、水の流れた跡と見られる。



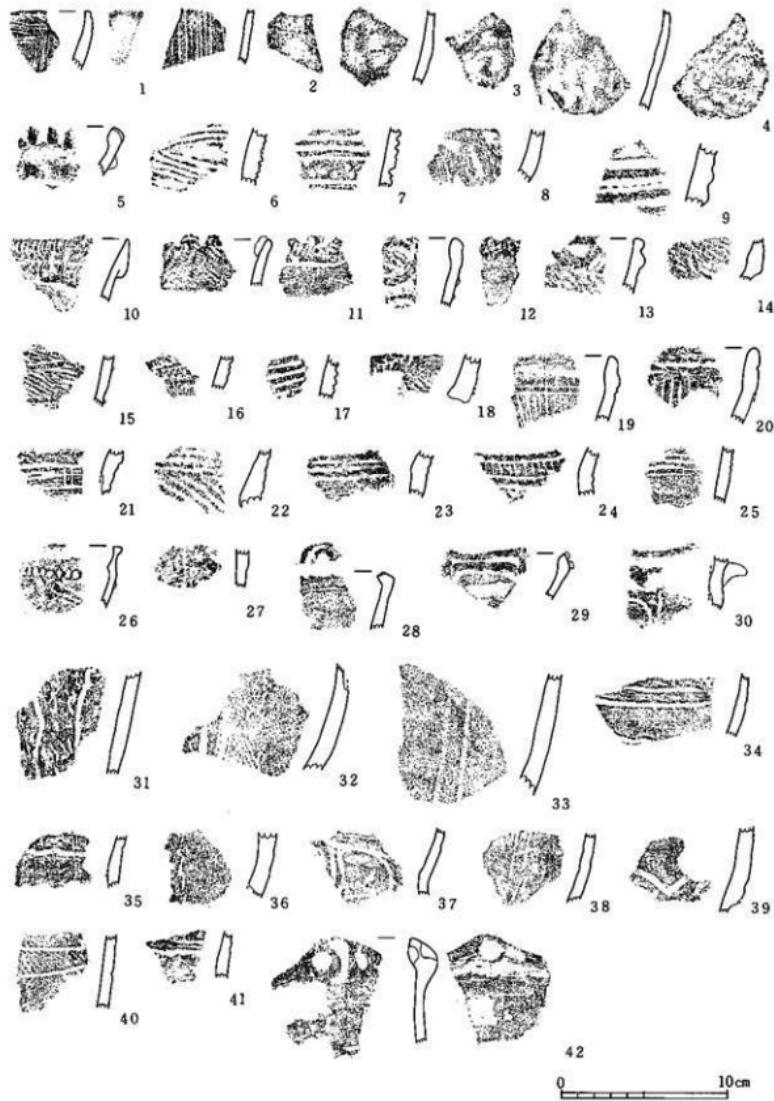
第38図 ST 01



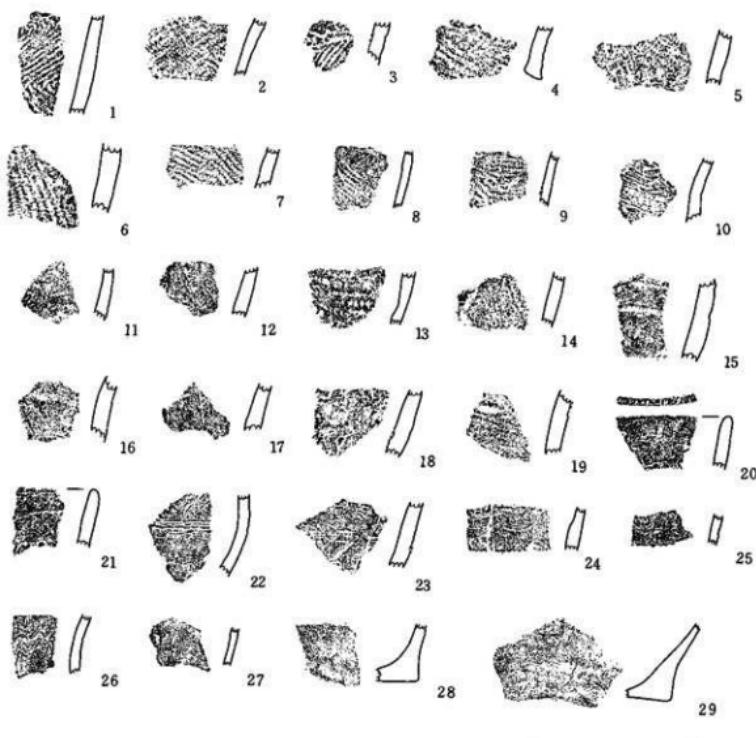
第39図 SD 01



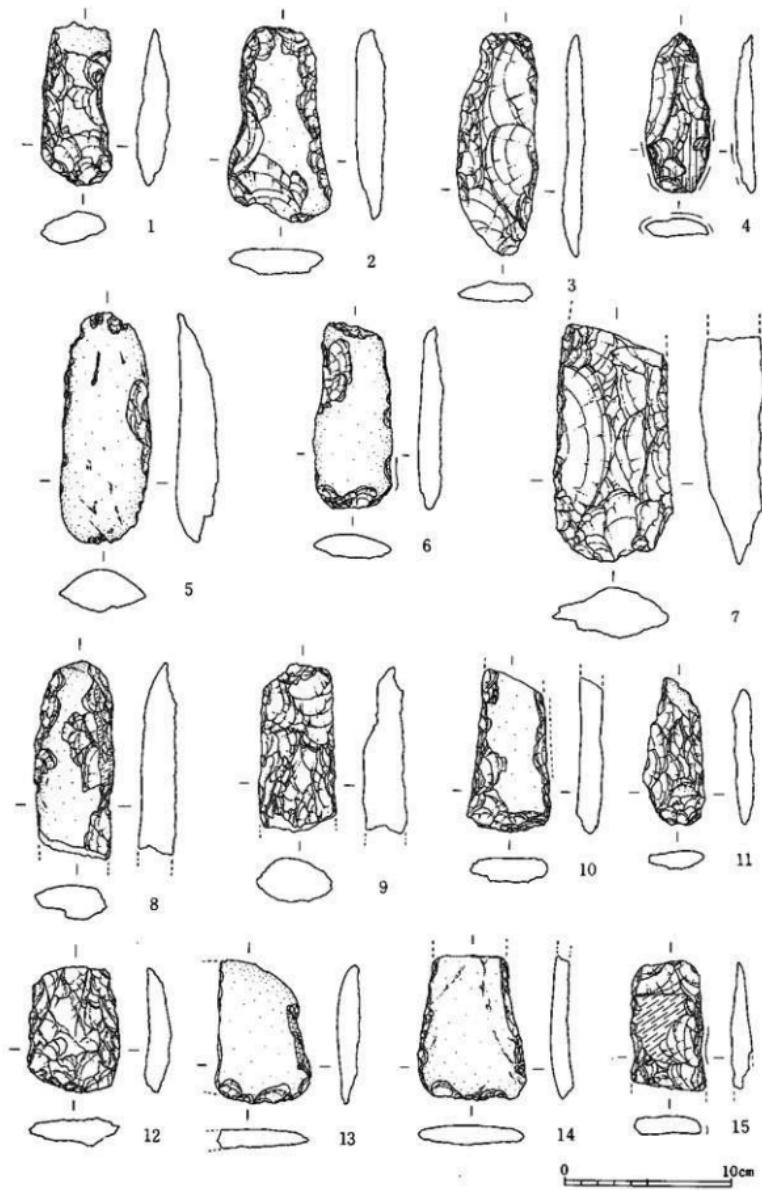
第40図 遺構外出土遺物（1）



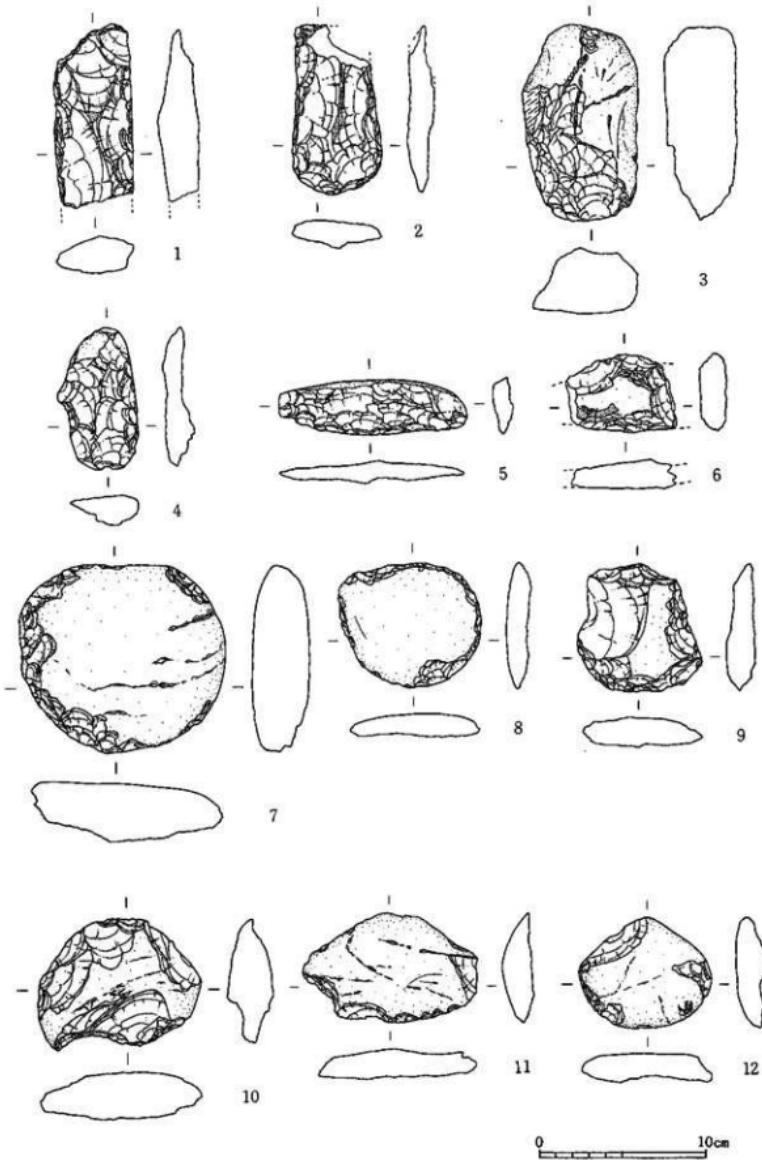
第41図 遺構外出土遺物（2）



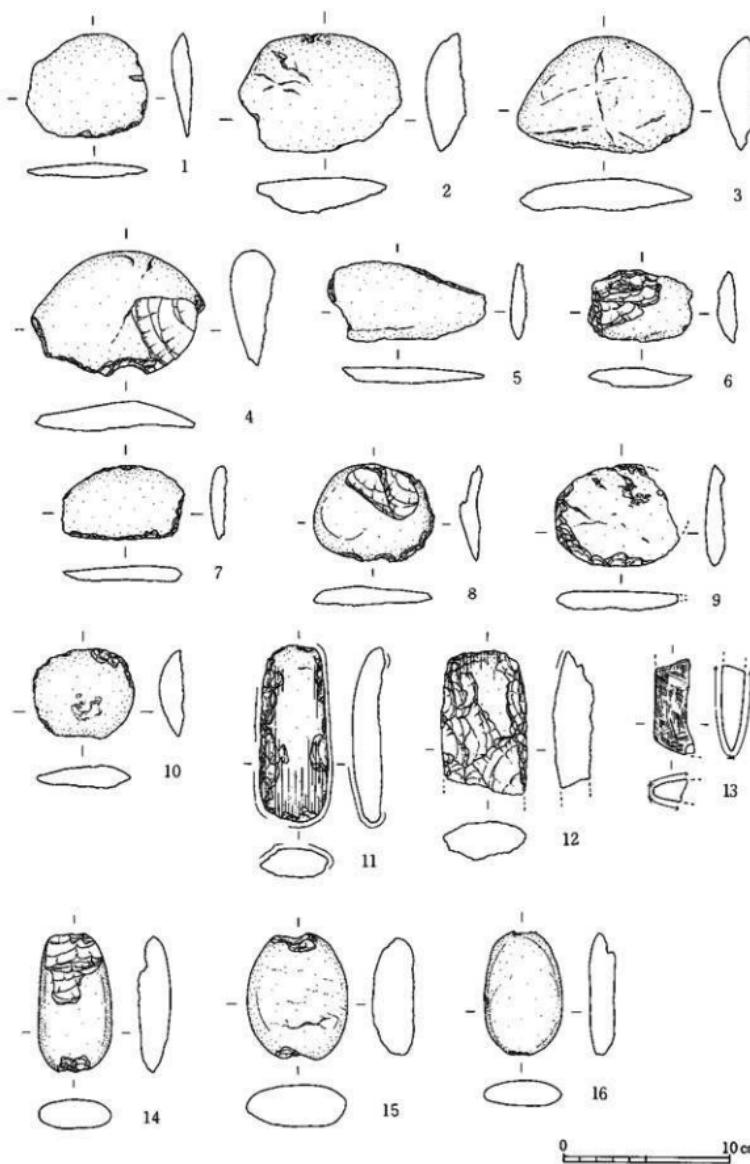
第42図 造構外出土遺物（3）



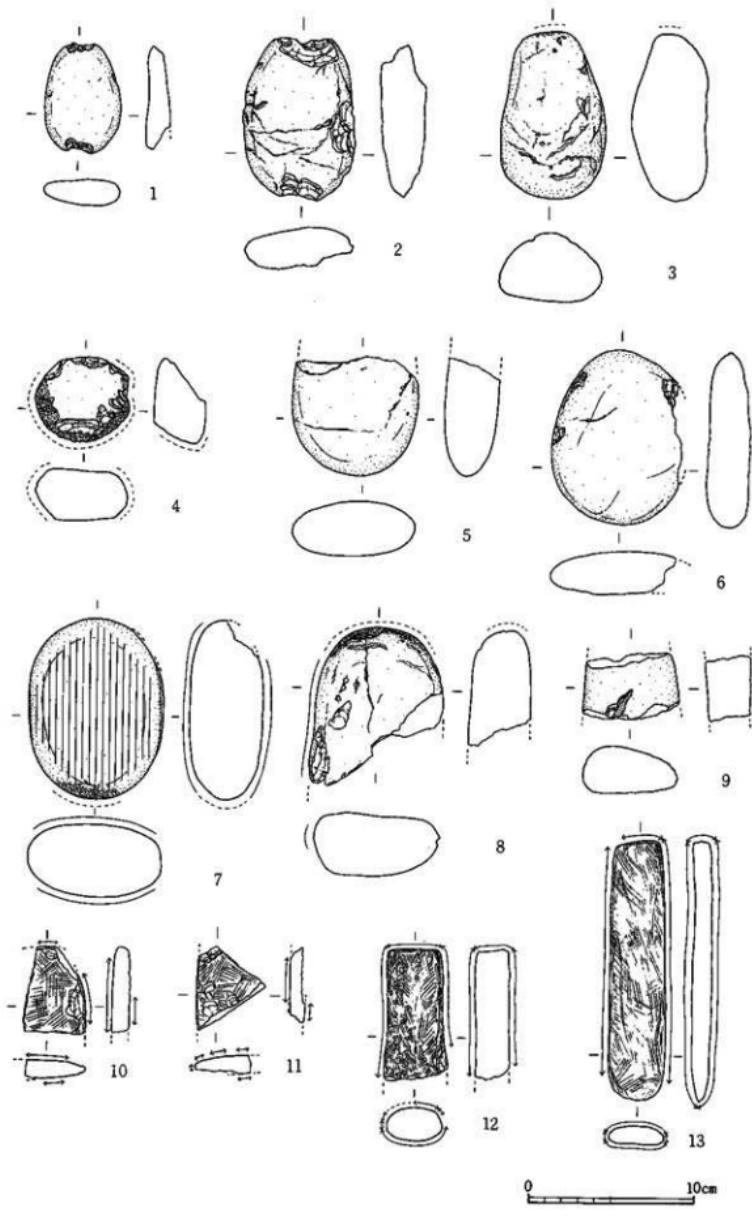
第43図 遺構外出土遺物（4）



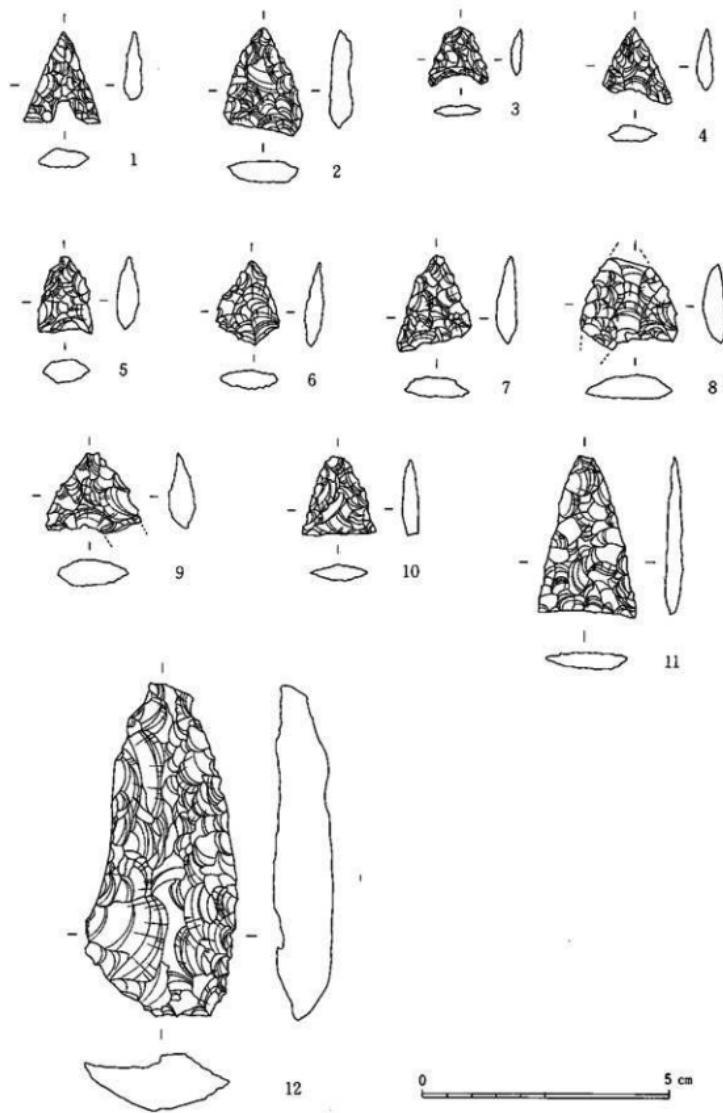
第44図 遺構外出土遺物（5）



第45図 造構外出土遺物（6）



第46図 遺構外出土遺物（7）



第47図 遺構外出土遺物（8）

## IV 総括

今回の調査は、県道整備事業予定地という狭い範囲に限られたもので、遺跡全体から見れば、そのごく一部に試掘坑をあけた程度のものといえる。その調査結果は、本文中に記したとおりであり、今までには地表面において微量な遺物のみで推測されていた本遺跡の実態により深く触れるこことできた調査であった。特に縄文時代早期前半の黒鉛を含む押型文を主体とする住居址は、伊那谷地域では類例がほとんどなく、岐阜地方の沢式と立野式、樋沢式との関連性が注目される資料である。また、縄文時代前期終末の住居址からは、近畿地方の大歳山式土器と関東地方の十三善台式土器・五頭ケ台式が共存しており、当地方の複雑さを窺わせる資料として注目されよう。そこでこれらに関する調査成果の到達点と課題を中心に、時代毎の概要を記して、今次調査の総括としたい。

### 1. 縄文土器の概要

黒田大明神原遺跡からは縄文時代草創期から晩期にかけての遺構・遺物が出土している。遺構としては多數の集石、遺物では早期前半の押型文土器や前期終末の土器群が注目される資料と言える。このため縄文時代各期について遺物を中心概観したい。

#### (1) 縄文時代草創期

本遺跡出土の縄文時代草創期と考えられるものとして、表裏縄文土器2片（第34図23、第40図1）がある。明確な遺構は確認されず、SK14及びグリットからの出土である。

#### (2) 縄文時代早期

縄文時代早期前半の住居址が1軒、早期後半の住居址1軒および集石3基。土坑2基が確認されており、特に、SB01からは黒鉛を僅かに含み、山形文を主体とする押型文土器が出土している。またSK14・SK17などからは条痕文系土器の良好な資料が出土している。

1) 押型文土器 押型文土器はSB01を中心に、グリットなどから総数33点出土している。これらの内訳は、山形文28点、格子目文1点、梢円文3点である。特にSB01の押型文土器は山形文のみで構成されており、これに帶状施文の縄文土器が1点と無文土器4点が併存している（第10図）。SB01の押型文は、1～9の土器が同一固体、および14・15の土器が同一個体と考えられる。このうち1～3、5～9の土器は山形文が縱方向に密接して施文されている。4は器面の大部分が剥落しているものの、残存する部分には無文部が見られる。1～9の土器の山形文は、原体長は約15mm、4条2単位、反復距離は17mmの原体を用いている。色調は褐色から灰白色を呈し、胎土に微量の黒鉛を含むと思われる。器壁は5mm程度である。14・15は原体長18mmで、反復距離は13.5mmをはかる。山形文を3条2単位の原体で2帯1組の横位帶状施文し、原体端部は両端とも削ぎ落とされ、上下で90度ずれている。内面には指頭痕がみられる。色調は褐色で、胎土に長石・石英などを含む。厚さ5mm。10は振り幅の大きい山形文が縦位施文される。色調は褐色を呈し、胎土に石英・雲

母を多量に含むが、厚さ4mmと薄い。

住居址以外の遺構出土の押型文として、S I 25出土の第37図24は、4条2単位、反復距離12mmの原体で、振り幅の小さい山形文を外面縦位・内面横位に帯状施文される。色調は褐色で胎土に多量の石英・雲母などを含む。第36図19はS I 05出土で、条数不明で1単位と考えられる凸部の小さい山形文で、立野式に近い原体であるが、少量の黒鉛を含む他、石英、雲母を含む。色調は灰白色で厚さは4mm、接合部で剥落している。第37図21はS I 21から出土し、条数不明で2単位、反復距離が21mmを測り、格子目文が横位施文される。胎土に石英・長石を多量に含み、色調は褐色を呈する。厚さ8mm。

遺構外出土の押型文土器として、第40図3は3条2単位の原体で、山形文が縦位密接施文される。反復距離が18mm、色調は褐灰色で、胎土に長石を含む。4は振り幅の大きな山形文を縦位密接施文する。内外面の摩耗が著しいが、胎土に石英など含み、色調は灰褐色を呈す。5は、条数不明2単位、反復距離が21mmの原体を用い、凸部の小さい山形文が縦位密接施文される。色調は灰白色を呈し、胎土に石英及び微量な黒鉛を含むと思われる。6は、4条2単位、反復距離18mmの原体を用い、山形文が縦位密接施文される。厚さ6mm。内外面とも灰白色を呈し、胎土には長石・黒鉛を微量に含む。10は原体長14mm、反復距離18mm、3条2単位の原体を用い、山形文を胴部上半に縦位施文し、20mmほどの無文部を残し、以下横位密接施文される。色調は褐灰色で胎土に細かい石英を含む。11は、乗数不明2単位、反復距離11mmで、楕円文が横位密接施文される。上端は接合部で剥落する。長石・石英などを含む。色調は褐色を呈する。12は、摩耗が激しいため詳細は不明であるが、条数不明で2単位、反復距離が13mmを測り、楕円文が横位密接施文される。厚さ8mm、胎土に石英長石を多量に含むもろい土器である。色調は黒褐色を呈する。13は、条数不明2単位で反復距離は13mmを測り、大粒の楕円文が横位密接施文される。胎土には石英・長石を含み、色調は黒褐色を呈する。厚さ8mm。

これらSB01に代表される山形文施文の押型文土器は、第10図1～9・第40図5、6のように器壁は薄く、胎土に僅かに黒鉛が含まれており、立野式に特徴的なやや厚手で大粒の石英・長石などを多量に含む胎土とは差異が見られる。こうした胎土の特徴は、岐阜県を中心に分布する「沢式土器」に類似している。一方、原体及び施文技法の特徴は、「立野式土器」との間で共通点が多く見られる。口縁部破片を欠き、全体の文様構成の詳細が不明であるため型式名を即断することはできないが、両者の中間的な様相を持つ土器として考えられよう。また楕円文・格子目文を施文する土器は、胎土。原体及び施文技法から「立野式」に比定されよう。

- 2) 沈線文系土器 今次調査では総点数4点みられ、そのいずれもグリットから散在しての出土であった。第40図14・15は、口縁直下に径5mm程度の断面円形の棒状工具を用い、2段に刺突を行い、同一工具を用いて刺突下に綾杉文状の文様を構成すると考えられる土器である。胎土には纖維を多量に含み、白色粒子及び長石粒が密に混入している。裏面には条痕などの調整がみられない。17は径3mm程度の棒状工具を用い、刺突を2段施文しており、おそらく14・15に類似する土器と考えられる。20は口唇部に竹管状工具による幅広の刻みを施し、口縁部には、同一工具による幅広の結節沈線文を平行に巡らしている。厚さ1cmほどの厚手の土器で、胎土に纖維を僅かに含み、金色雲母を多量に混入している。裏面には、条痕などの調整は見られない。14・15に代表されるこれらの土器

群は、茅野市判ノ木山西遺跡（長野県教委 1981）、望月町新水遺跡（長野県考古学会 1996）、飯田市中島平（飯田市教委 1977）等県内各地で出土しており、沈線文系土器の県内における併行期の土器として注目されている。また、20は押型文系土器群最終末の相木式に類似するものの、押型文が見られない。以上の点から、上記の遺跡と同様な編年的位置づけがなされよう。

3) 条痕文系土器 条痕文系土器は、SK14・SK17などで良好な資料が出土している。第34図19～22は、SK14出土遺物である。21・22は同一固体で、四単位波状口縁を有し、波頂部は突起状を呈する。口縁部直下及び有段部にはヘラ状工具の尖端による連続刺突を巡らせており、その間に斜方向への連続刺突文が数条施されている。内面には貝殻条痕文がほどこされており、胎土には纖維を多量に含む。これらの特徴から東海地方の柏畠式に比定される。

第35図9～18は同一固体で、SK17出土遺物である。波状口縁を有し、口唇部には内削ぎ状に棒状工具による刻みが施される。内外面共に貝殻条痕文が施される。器壁は薄く、胎土には纖維を多量に含み焼成は良好である。こうした特徴から、関東地方の条痕文系土器後半の土器群に併行すると考えられる。

4) 無文土器 無文土器は、SI11ほかグリットから出土している（第37図4～14、第40図26～42）。これらの特徴は、内外面に浅い擦痕状の調整がみられ、胎土に纖維を多量に含み、器壁は1.5cm程度とやや厚手の土器である。また第40図19は口縁部破片で、口唇部に棒状工具による刻みが施される。42はやや小振りの底部である。小破片が多く詳細は不明であるが、縄文早期終末に位置すると思われる。

### （3）縄文時代前期

縄文時代前期の遺構としては、SB07・10・17・18、ST02、SK02・03・07～10・15・16・18・19・24、SI01・05・18・21などがあげられる。遺物の大半が断片的な破片ではあるが、SB10に代表される前期終末の好資料が出土している。これらのうち代表的な資料について記述する。

1) 縄文前期前葉の土器 ST02のピット覆土中およびその周辺から僅かに見られた（第24図2～11、第34図12～14、第41図1～4）。いずれも器壁は薄く、内外面に指痕痕が顕著に見られる。第41図1は口縁部破片で、口唇部直下に半截竹管状工具を用いた刺突が施され、以下同一工具による横位の縦杉状沈線文が施される。第24図2・3・8・10などには、半截竹管状工具による沈線が密に施文される。以上の特徴から東海地方の前期前半の木島VI式に比定されよう。

2) 縄文前期終末～中期初頭の土器 SB10・ST02・SK18などから比較的まとまった資料が出土している。第12図1はSB10の炉体土器として出土したものである。器形は口縁部を欠くものの、底部より外反し胴部上半に最大径をもつ深鉢形土器で、底部は縁から深い快りがはいった多角形を呈する。器面全体に単節縄文RLを施し、胴部上半部に弧の部分が上位にくる円弧を横位に連ねた断面三角形の隆帯を2条重ね、横位に1条の隆帯を貼付している。隆帯上は無文となる。5・6は同一個体の土器で、ややな内弯気味にたちあがる波状口縁部で、内面には明確な段を有する。器面全体に単節縄文RLをほどこし、弧の部分が上位にくる円弧を横位に連ねた文様構成を隆帯により作出している。また波状口縁下には円環状に、口縁部及び頸部にも横位の隆帯が2条貼付される。隆帯は断面三角形で隆帯上には半截竹管状工具による刺突文が施される。口縁部内面の有段部には

縄文が施文され、横位隆帯が3条貼付される。隆帯上には刺突がみられる。これらの土器群はその特徴から関西地方の大歳山式と考えられる。

第24図1はS T02のピットから出土したものである。口縁部を欠くものの、器形は胴部が筒型になる深鉢形土器で、頸部には横位に押圧隆帯文が貼付されている。胴部は4分割され、半截竹管状工具を用いた半隆起線文により渦巻状のモチーフとX状のモチーフが交互に配される。半隆起線文によるモチーフは、半截竹管状工具による沈線文で結節浮線文状に刻まれている。各モチーフの間隙は三角印刻文状に削られている。これに類似する土器は、岡谷市大久保B遺跡（三上 1987）などで出土しており、中部地方では晴ヶ峰式として、関東地方では十三善台式とされてきた土器に比定されよう。

第36図1はSK18から出土したものである。肥厚口縁に三角印刻文が施され、胴部上半には結節浮線文により曲線的なモチーフを構成する。胴下半部には縄文が施文される。特徴から北陸地方の鍋屋町式に比定される。

以上のように黒田大明神原遺跡では関西系の大歳山式、北陸系の鍋屋町式、中部地方の晴ヶ峰式など各地の土器群が混在して出土している。特にSB10（第12図・第13図）では大歳山式（第12図1・5・6）、晴ヶ峰式（第13図7～14）。中期初頭の五領ケ台式（第13図23～27）がそれぞれ併存しており、その伴出関係が注目される。また中部高地の在地の土器型式として晴ヶ峰式があげられるものの、飯伊地方では飯田市辻垣外遺跡（長野県教委 1968）。飯田市今洞遺跡（宮沢 1966）・阿智村昼神中平遺跡（阿智村教委 1977）などにみられるように近畿地方の大歳山式が主体となる遺跡が多く、当方が極めて関西的色彩の強い地域であったことを示している。

#### （4）縄文時代中期

SB13が該当する（第22図1～3）。当地域の典型的な様相を示す結節縄文を施文する土器で、胴部に隆帯で縦位の横円区画を施し、単節縄文LRの結節縄文を充填し、周辺の縄文の一部を磨り消す特徴がみられる。これは神村透氏の言う結節縄文Ⅰ期とⅡ期の中間的様相を示す。（神村 1978）

#### （5）縄文時代晩期

SK01が該当する（第34図1）。土坑内で横位に置かれていた土器で、土器棺としての機能が推定される。胴部上半に最大径をもつ壺に近い深鉢形土器で、口唇部に小突起を有し、口縁部に2条の沈線を施す。特徴から水Ⅱ式に比定される。

## 2. 縄文時代の集落について

### （1）早期前半

調査区北西隅の浸食谷に面した段丘縁部から押型文土器を主体とする住居址（SB01）が確認されている。住居址の規模は2.4m×2.35mのほぼ円形を呈し、住居内には土坑が見られる。柱穴は住居内外部には見られず、壁の立上がりも緩やかである。床面は堅固で、遺物の大半は床面よりやや浮いた状態で出土している。押型文期の住居址は岡谷市樋沢遺跡（戸沢充則ほか 1985）・伊那市三つ木遺跡（林茂樹 1983）・児塚遺跡（飯塚 1983）・小谷村林頭遺跡（神村 1983）などで確認されてお

り、いずれも直径2.5m程度に収まる小形の住居址が多く、その形態も本遺跡のSB01に類似している。しかしながら今次調査では住居址1軒の検出にとどまったため、詳細は不明であるが、調査区北側に集落が広がる可能性がある。

#### (2) 早期後半

早期後半の遺構としては、SB06・SK14・17・SI11・16などがあげられる。SB06はSB07に切られているため全体の形は不明であるが、柱穴・炉址は見られず、床も軟弱である。当該期の遺構は散漫な分布を示し、調査区西側に多く認められる傾向にある。

#### (3) 前期前半

前期前半の遺構としては、SB07・18、SK10などがあげられる。住居址は調査区ほぼ中央の平坦面から斜面への変換点に重複して存在し、SB07が新しい。SB18はSB07、ST02に切られるため、全体の形は不明であるが、住居址ほぼ中央に橢円形の地床炉がみられ、当該期の住居址の特徴をよく示している。SB18の北側にはSK10がみられる他、当該期の遺構は周辺に存在しない。遺構の分布および地形の特徴から、集落の中心は北西側の平坦面に展開していると推定される。

#### (4) 前期終末

前期終末の遺構としてはSB10・17、ST02、SK07・15・18・19、SI01、09・18・21などが確認されている。当該期の遺構の多くは調査区北西の平坦面に見られ、SB10の西側には集石が集中し、周辺には土坑が散在する。また大型建物址と推定されるST02は調査区ほぼ中央の平坦面から斜面への変換点に位置している。こうした点から居住域は調査区外北西側の平坦面に中心が推定され、調査区を含む斜面部には、集石・土坑及び建物址などがつくられた区域と考えられる。

#### (5) 中期後半

調査区南側の斜面部で住居址が1軒確認されたにすぎない。1軒のみのため集落の構成など詳細は不明であるが、今次調査区西側の丘陵上には当該期の大規模な集落が確認されている点から中期後半には集落の中心が西側に移動したと考えられる。

#### (6) 晩期後半

土器棺が埋納されていたSK01が調査区南端斜面で確認されたにすぎない。調査区周辺の斜面部に同様な施設が存在すると思われるが、居住域などは不明である。

### 3. 縄文時代の集石について

本遺跡からは、合計28基の集石が確認されている。出土遺物はほとんど見られず、時期を特定できた集石は少なく、縄文早期前半1基、早期末3基、前期末4基のみである。これらの集石はその形態からいくつかに分類され、それぞれが集石の使用過程を示していると考えられる。ここでは集石の分類を行い、その特徴などについて検討したい。

#### (1) 集石の分類

集石の分類にあたっては、平面分布・掘り込みの有無・礫の大きさ・構成礫数・赤化の有無などを考慮して行った。

A類 掘り込みを持ち、直径15cm内外の赤化礫が主体となり密集して掘り込み内に見られるもの。

構成礫数は22~97個と多く、礫にはタール状の付着物がみられる。掘り込み内には炭化物が見られる。S I 12が本類の典型としてあげられる。本類に該当する集石はS I 05・12・13・16・18・20・22・25の8基である。

B類 掘り込みを持ち、直径15cm内外の赤化礫が主体となり、掘り込み上面に散漫な分布を示すもの。構成礫数は3~65個とばらつきがあるが20個以下の集石が最も多い。炭化物が見られる。本類に該当する集石はS I 01・02・06・07・09・10・11・14・15・19・21・22・24の13基であり、代表的なものとしてS I 01があげられる。

C類 掘り込みは持たず、直径15cm内外の赤化礫が主体となり、広範囲に散漫な分布を示すもの。炭化物が平面的に分布する。構成礫は80個以上が多い。本類に該当する集石はS I 17のみである。

D類 掘り込みを持ち、直径10cm内外の礫が主体となり、掘り込み内外に礫が分布する。礫には赤化が見られず、破碎礫も見られない。本類に該当する集石はS I 08・26・27・28・29で、集石ではない可能性もある。

E類 掘り込みを持ち、掘り込み底部に大型の礫を敷き、周囲に礫が配置されるもの。構成礫は大きく、すべてに赤化が見られる。本類に該当する集石はS I 03のみである。礫が意図的に配置されており配石の可能性がある。

## (2) 集石の分布

A類からE類に分類した集石の調査区内での分布を見ると、A類は調査区南西側にほぼ集中し、B類は調査区北西部にほぼ集中してみられる。また各類の時期を検討すると南西側の集石は早期末葉が多く、調査区北西部の集石は前期終末が多い傾向がみられる。一方、調査区は北西から南東に緩やかな傾斜をする細長い台地で、調査区西側は湿地となる。こうした地形的な視点からみると北西側の集石は台地平坦面からの変換点に位置し、南西側の集石は湿地に向かい緩斜面に集中する。これらの点から早期末の集石は斜面部に、前中期の集石は平坦部に選地されたことが推定されよう。また集石は蒸焼きあるいは石焼き調理の施設としての機能が推定されているが、分類した形態はある程度、集石の使用過程を示していると考えられる。すなわちA類にみられる構成礫が多く掘り込み内部に礫が密集する集石は使用直後の形態あるいは造営直後の形態に極めて近いと思われ、B類の掘り込み上部に礫が散在する集石は使用後あるいは廃棄後の形態に近いと言えよう。一方、C類の多量な礫が広範囲に平面的な分布を示す形態の集石は異なる機能を持つ可能性がある。しかし、集石の形態・構成礫数の多寡・平面的な分布は自然營力や人為的行為による拡散を考慮すべきであろう。

## 4. 弥生時代の様相

今次調査では調査区全域で遺物が散漫に出土した(第42図20~29)。いずれも細片で詳細は不明であるが弥生時代後期前半に位置付けられる。今次調査区南側では弥生時代後期の住居址・方形周溝墓などが検出されており(上郷町教委 1990)、居住域ではなく別の土地利用がなされていたものであろう。

## 5. 中世以降の様相

弥生時代以降、今次調査区内では中世まで人々の生活した痕跡は認められない。この間の土地利用状況は不明であるが、中世以降の遺構としてはST01が確認されている。ST01は2棟の建物が廊下でつながっており、一般的な住居や倉庫とは異なり特別な機能をもつ建物と推定される。平成8年度調査では今次調査区南側から方形窓穴が検出されており、遺跡周辺に中世城郭が存在する可能性がある。

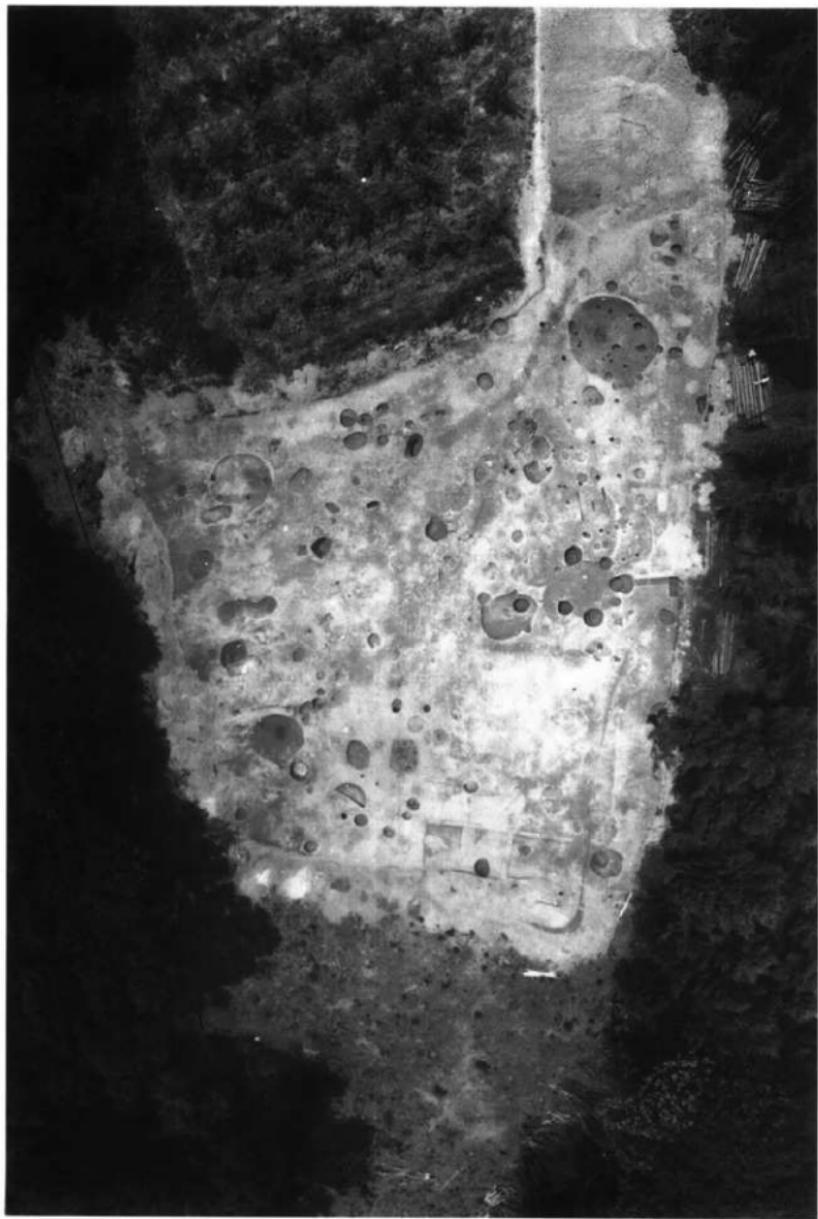
今次調査の結果は以上のとおりで、遺跡のごく一部を調査したのみにかかわらず、縄文時代早期・前期についていくつかの新知見を加えることができた。特に、縄文時代早期の押型文の住居址およびその出土遺物は、立野式・沢式・桶沢式などの押型文諸型式の相互関係にとって重要な資料と言えよう。また、前期末の住居址及びその出土遺物は、当該期における飯伊地方の様相を端的に示していると思われる。また黒田大明神原遺跡全体からみると、各時代における集落の選地および土地利用に差異が見られることも判明した。こうした新知見を加えることのできた黒田大明神原遺跡ではあるが、今次調査の要因となった県道バイパス整備事業を皮切りに、周辺の開発が急激に進むことが予想され、遺跡の破壊は必至と思われる。このため、今まで以上の地道な文化財保護の本旨に則ったたゆまない努力こそ肝要である。

## 参考文献

- 長野県教育委員会 1981 「判ノ木山西遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書  
茅野市・原村その3』
- 紅村 弘 1981 『東海先史文化の諸段階』
- 長野県教育委員会 1982 「阿久遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 原村その5』
- 渋谷昌彦 1982 「木島式土器の研究－木島式土器の型式細分について－」  
『静岡県考古学研究』11
- 戸沢充則ほか 1985 『桶沢遺跡』
- 長野県教育委員会 1987 「大久保B遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書1』
- 飯田市教育委員会 1988 『北田遺跡』
- 長野県史刊行会 1988 『長野県史 考古資料編 遺構・遺物』全1巻(4)
- 長野県史刊行会 1988 『長野県史 考古資料編 主要遺跡(南信)』全1巻(3)
- 塩尻市教育委員会 1988 「向阳台遺跡」『一般国道20号改築工事埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
- 飯田市教育委員会 1989 『下原遺跡』
- 網谷克彦 1989 「北白川下層式土器様式」『縄文土器大観 1 草創期 早期 前期』
- 上郷町教育委員会 1990 『黒田大明神原遺跡』
- 下伊那史編纂会 1991 『下伊那史』第1巻
- 飯田市教育委員会 1994 『中村中平遺跡』
- 長野県考古学会縄文時代(早期)部会編 1997 『シンポジウム「押型文と沈線文」資料集』

写 真 図 版





図版 2



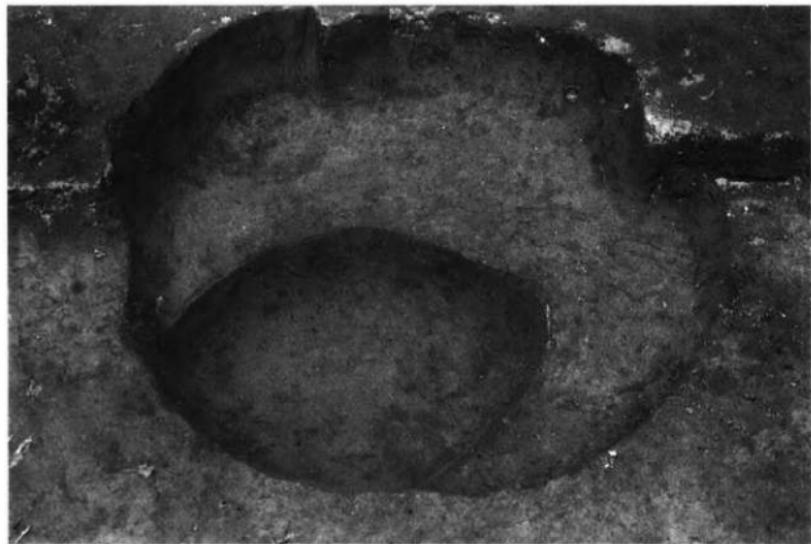
調査区遠景



調査区遠景



S B 01遺物出土状況

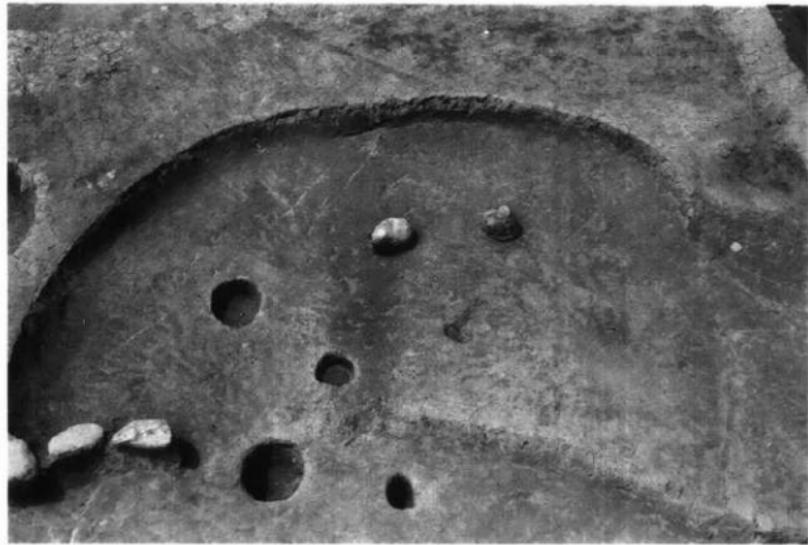


S B 01完堀

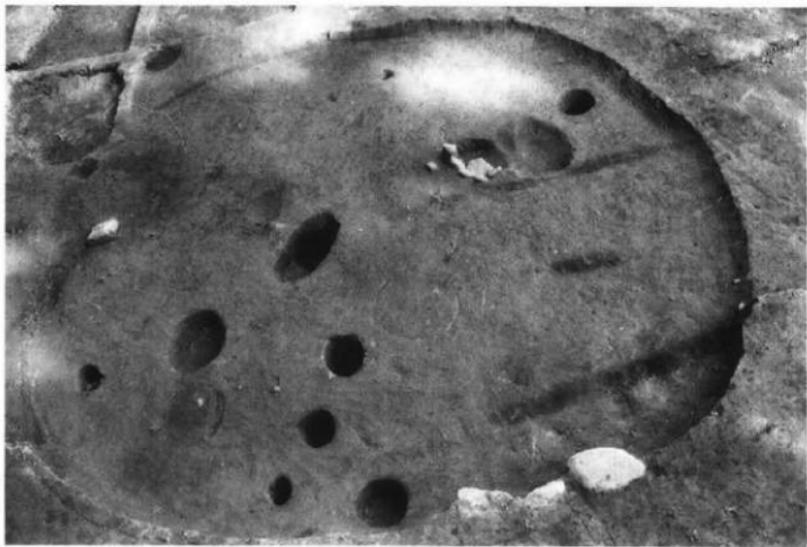
図版 4



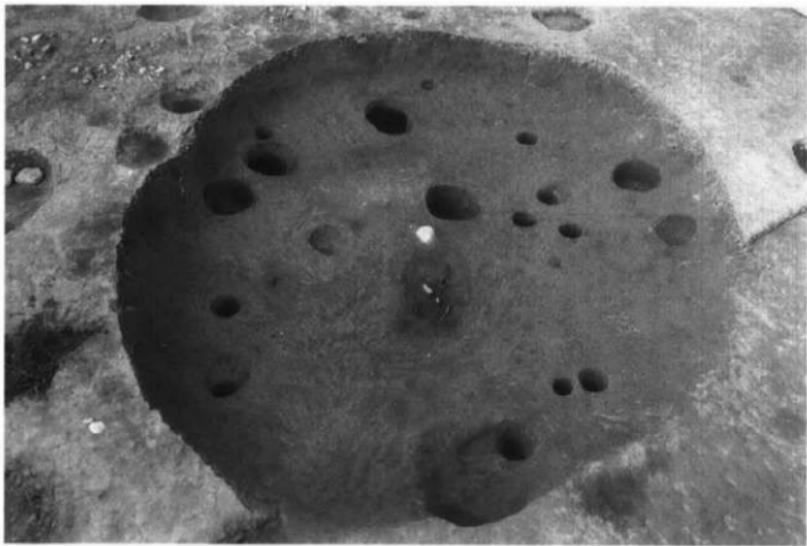
S B 02



S B 06

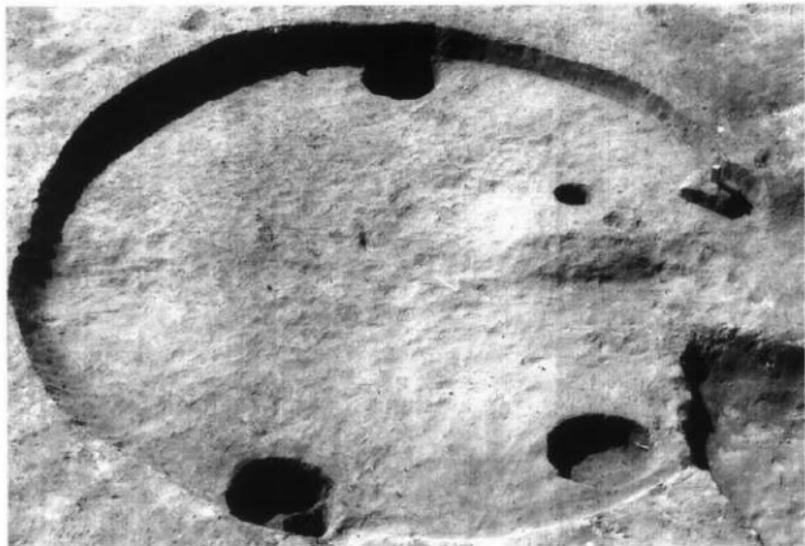


S B 07

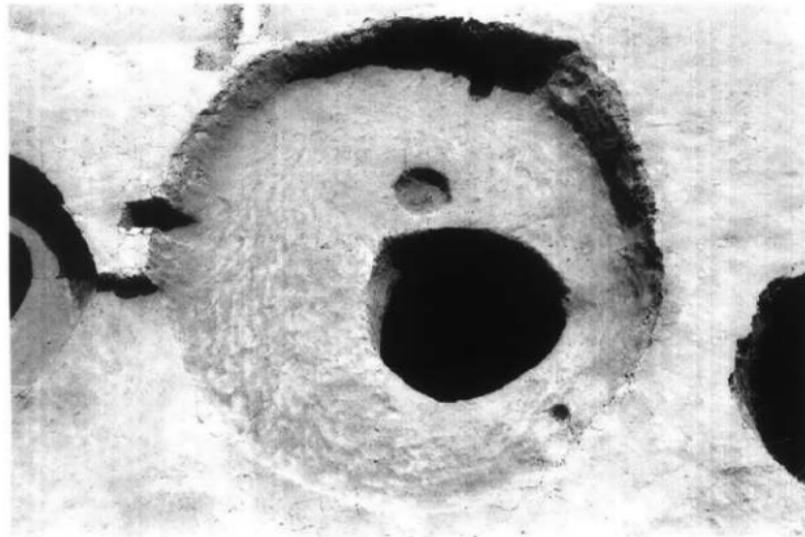


S B 10

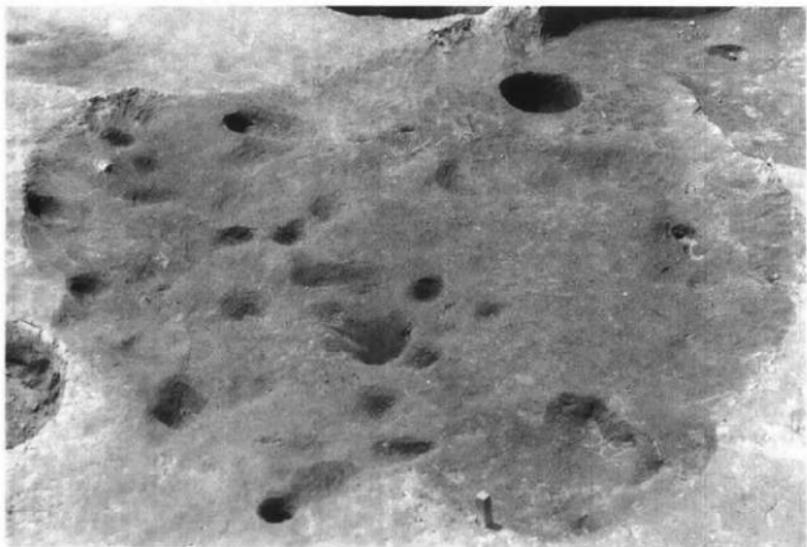
図 版 6



S B 13



S B 14

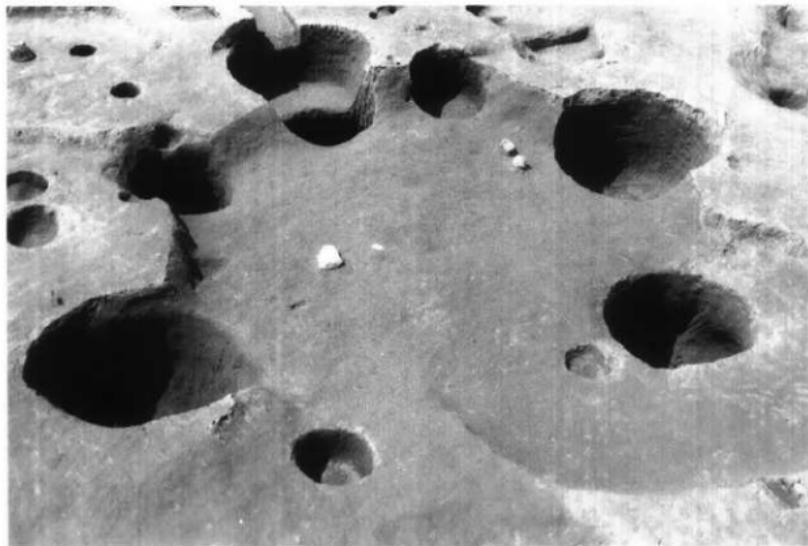


S B 15

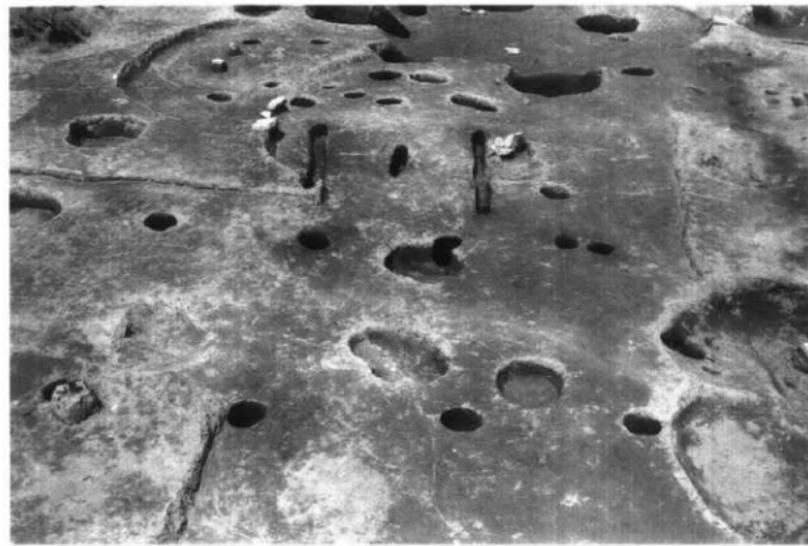


S B 17

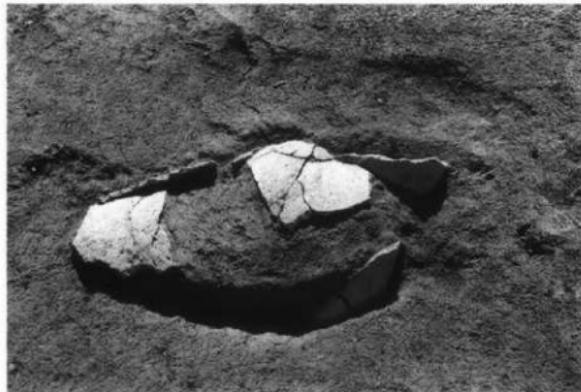
図版 8



S B 18 • S T 02



S T 01



SK01 遺物出土状況

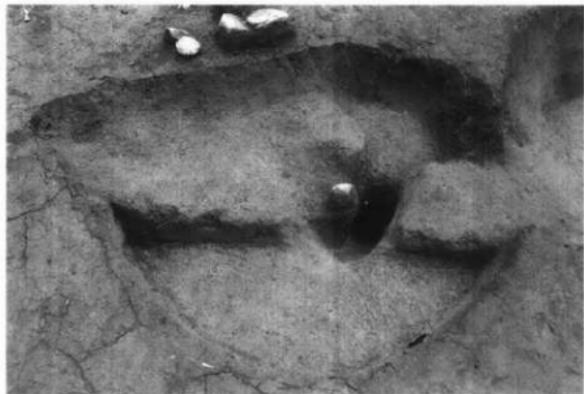


SK 14



SK14 遺物出土状況

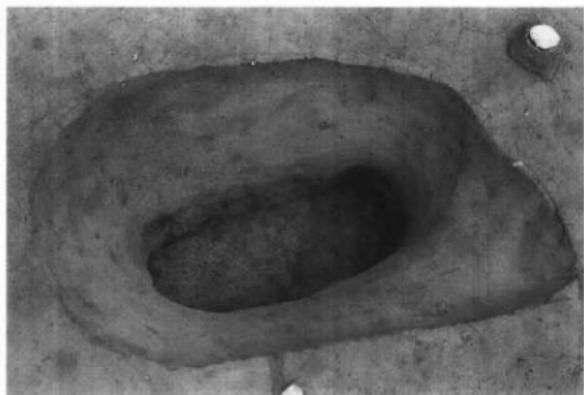
図 版 10



S K 21



S K 22



S K 26



図版 12

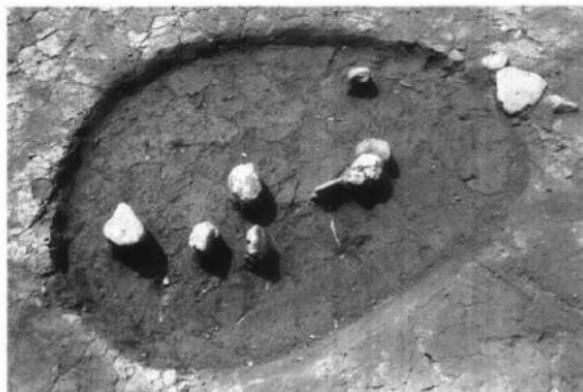
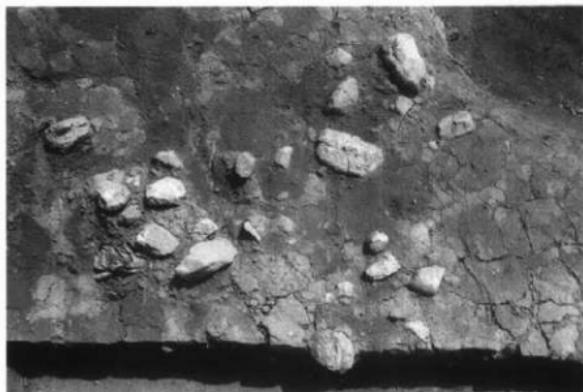




図 版 14



S I 14



S I 15



S I 16



S I 17



S I 19



S I 22

図版 16

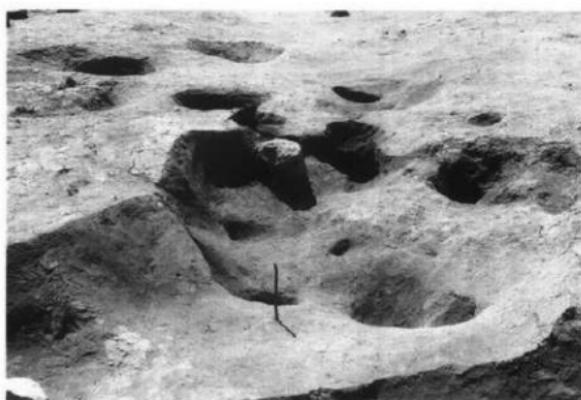




S I 28



S I 29



S D 01

図版 18

調査風景



重機作業風景



委託測量風景





S B01出土遺物



S B02出土遺物

図版 20



S B 06出土遺物



S B 07出土遺物



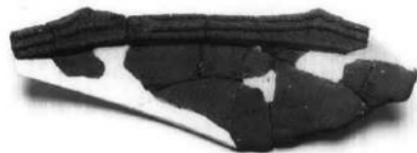
S B 10炉体土器



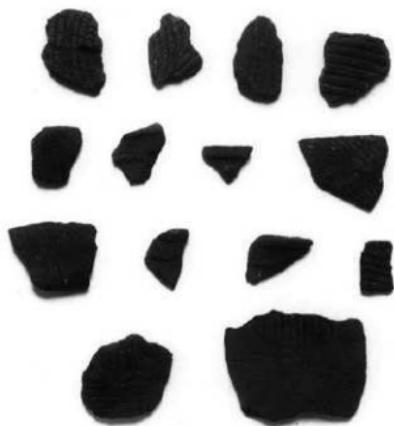
S B 10出土遺物



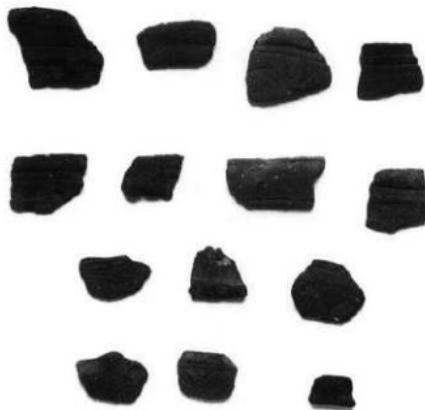
S B 10出土遺物



同 上



S B10出土遺物



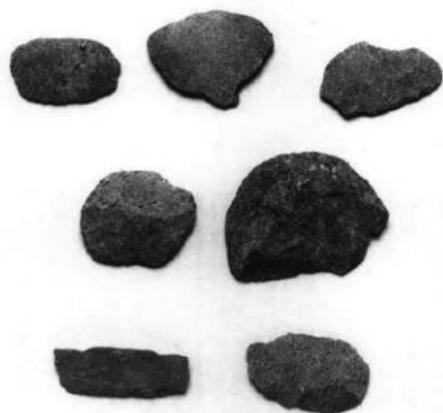
同上



S B 10出土遺物



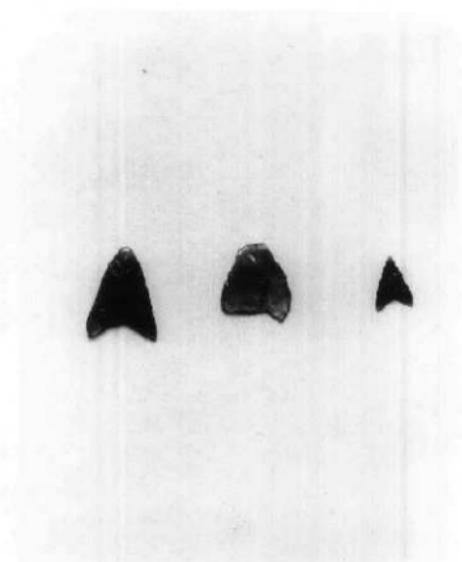
同 上



S B 10出土遺物



同上



SB10出土遺物



SB13出土遺物



S B17（上）S B18（下）出土遺物



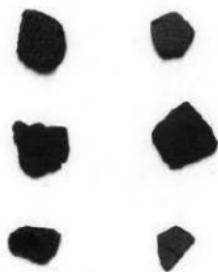
S T02出土遺物



S T 02出土遺物



S K 02・03出土遺物



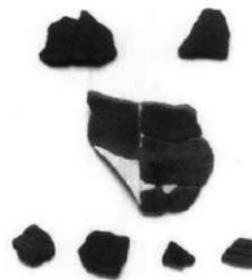
S K 07～09出土遺物



S K 10・11・13出土遺物



S K 15・16出土遺物



S K 17～19出土遺物



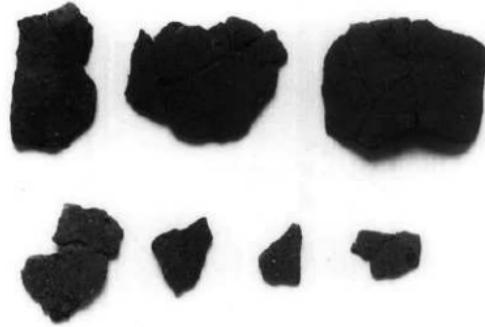
S K01出土遺物



S K18出土遺物



SK14出土遺物



同上



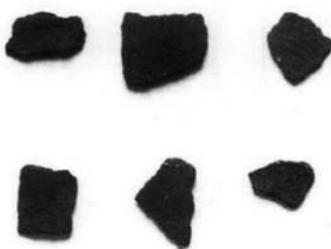
SK17出土遺物（表）



同（裏）



SK21・24出土遺物



SK24出土遺物

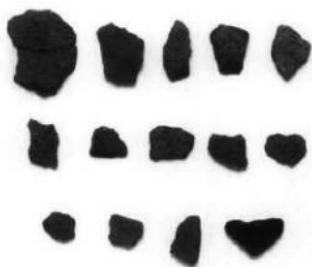
図版 32



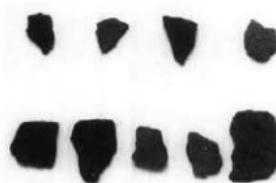
S I 01出土遺物



S I 05・09出土遺物



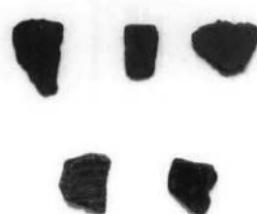
S I 11出土遺物



S I 16・18出土遺物



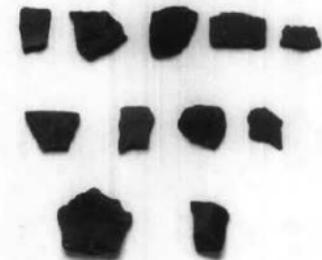
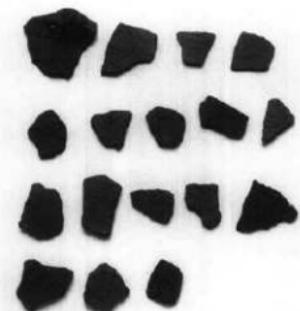
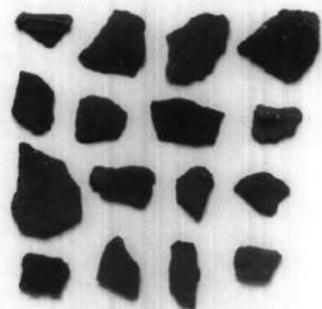
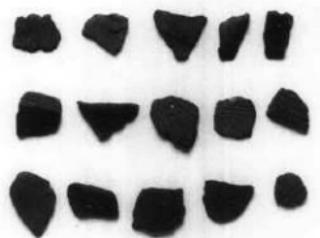
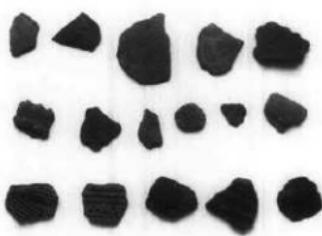
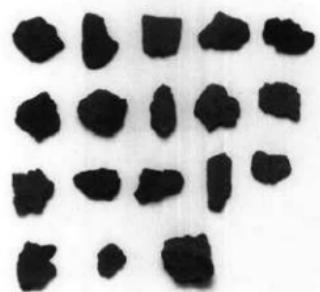
S I 19・21出土遺物



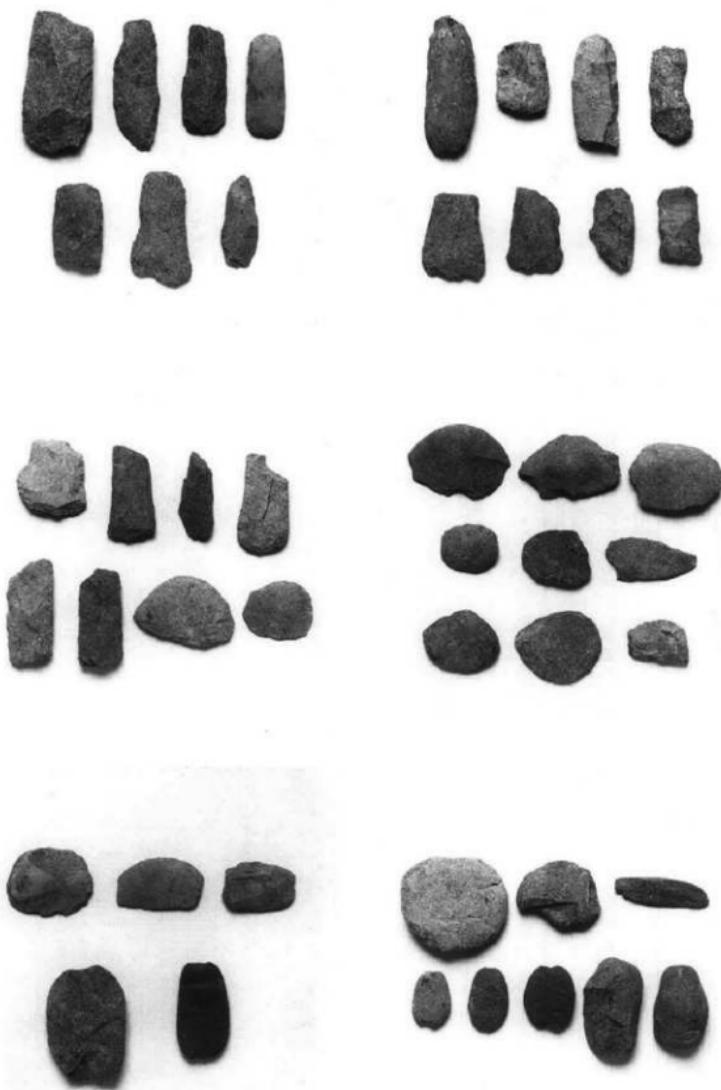
S I 25・29出土遺物



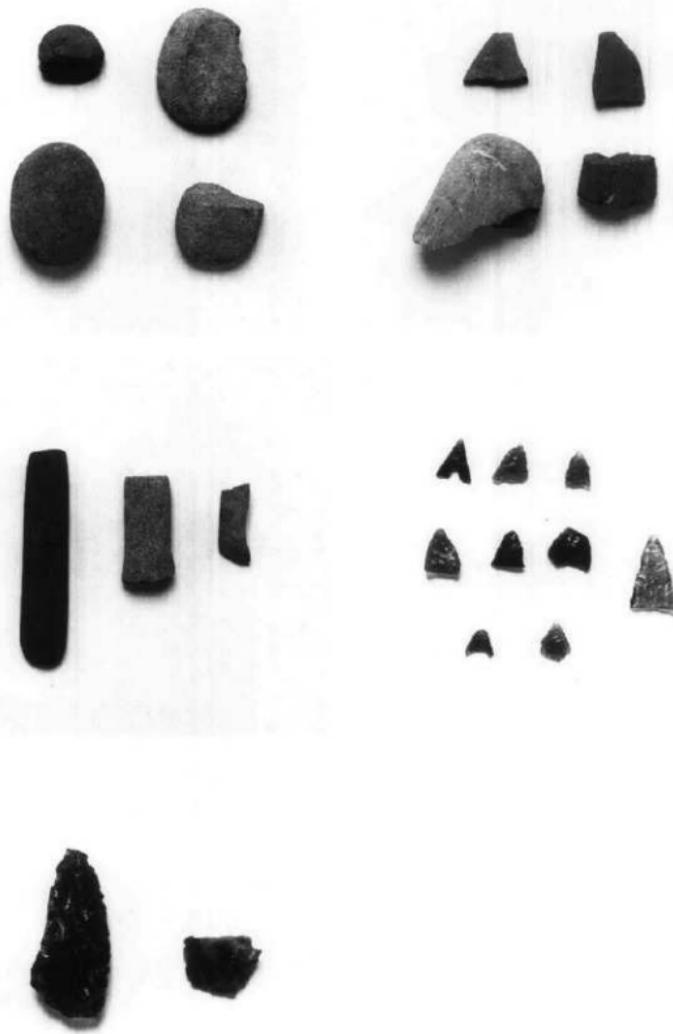
グリット出土遺物（1）



グリット出土遺物（2）



グリット出土遺物（2）



グリット出土遺物（3）

## 報告書抄録

ふりがな	くろだだいみょうじんばらいせき						
書名	黒田大明神原遺跡						
副書名	平成7年度 緊急地方道路整備B工事に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	下平博行・吉川 豊						
編集機関	長野県飯田市教育委員会						
所在地	〒395 長野県飯田市上郷飯沼3145番地 ☎0265-53-4545						
発行年月日	西暦1997年3月26日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号			㎡	
くろだだいみょうじんばら 黒田大明神原	いいたしかみさとくろだ 飯田市上郷黒田			35° 32' 36"	137° 50' 36"	平成7年 7月3日～ 平成7年	1,200㎡ 道路整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
黒田大明神 原遺跡	集落址	縄文 弥生 中世	竪穴住居址 掘立柱建物址 大型建物址 集石 土坑 溝	10軒 1棟 1棟 30基 21基 1条	縄文時代早期土器 縄文時代石器 弥生時代土器	含黒鉛の押型文土器 大歳山式の炉体土器	

---

## 黒田大明神原遺跡

1997年3月 発行

編集・発行 長野県飯田市教育委員会  
長野県飯田市上郷飯沼3145

印 刷 龍共印刷株式会社

---

